富山県

立山町埋蔵文化財

予備調査概要

1979年３月

立山町教育委員会

目　　次

Ⅰ　調査に至るまで……1
Ⅱ　地形と周辺の遺跡……1
Ⅲ　調査の概要……3
　1　辻遺跡……3
　2　浦田西反遺跡……4
　3　稚児塚古墳……5
　4　日中源平衛腰遺跡……6
　5　日中城跡……7
　6　日中墓ノ段遺跡……8
　7　竜ヶ浜遺跡……10
　8　白岩月ノ平遺跡……10
　9　新瀬戸窯跡……10
　10　越中瀬戸焼窯跡群（第1地点）……12
　11　越中瀬戸焼窯跡群（第2地点）……13
　12　法光寺谷古窯跡……16
　13　上末古窯跡……17
Ⅳ　まとめ
　参考文献

例　　言

1．本書は、富山県立山町内で、県営ほ場整備に先だち実施した埋蔵文化財予備調査の概要報告書である。

2．調査は、国庫および県費補助を得て、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて立山町教育委員会が実施した。

　なお、調査の一部は、富山県農地林務部（富山農地林務事務所）からの委託を受けて行った。

3．調査事務局は、立山町教育委員会に置き、社会教育課長松田十三男・社会教育係長中田徳男・社会教育主事前田智志が調査事務を担当した。

4．調査は、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事上野章・同岸本雅敏・同酒井重洋・同久々忠義・同橋本正春が担当した。

　調査期間中、富山考古学会々長湊晨・高岡市立博物館長定塚武敏の両氏から、指導と助言を受けた。また、資料・情報集収および調査の過程で、松岡宗次・水木進・安田良栄・加藤星照氏をはじめ地元の関係者各位の協力を得た。記して謝意を表する。

5．調査は、昭和53年春・秋の二季にわけて行った。調査は、辻遺跡ほか計13遺跡を対象とした。各遺跡ごとの調査時期・期間は、本文中に記した。

6．本書の編集は、岸本・酒井・橋本が協議して行い、図版作成・執筆は上野・岸本・酒井・久々・橋本が分担した。なお、各々の文責は、各章末に記した。

Ⅰ　調査に至るまで

立山町は、名所・史跡などが多く、古来より自然・文化を愛し、守ってきた町である。しかし、近年特に多くなってきた開発行為のために立山町の自然・文化は、そこなわれつつある。また、数多く行なわれる開発と遺跡の保護との調和は、むつかしいものになってきた。その中で、ほ場整備事業に関しては、事業実施前に試掘調査を行い、遺跡の有無、内容の確認をして遺跡の保護措置を講じるための協議を行う方法をとってきた。立山町で施行されるものについても、同様の手法を数年間とり、多数の遺跡を水田下等に保存している。

今回の試掘調査は、立山町教育委員会が主催し、昭和53年春に第Ⅰ期調査、同年秋に第Ⅱ期調査を実施した。調査員は、富山県教育委員会から派遣する事となった。調査は次の２方法を基本とした。

調査地区が広く、遺跡の範囲等が不確定なのは、１ｍ×１ｍの試掘区を各々約10ｍ間隔に設定する。

調査対象区内に周知の遺物採集地、伝承地等が含まれているものは、前記の方法の他に、１ｍ幅のトレンチを併用して、遺跡の確認を行なう。

第Ⅰ期の調査は、昭和53年度のほ場整備事業計画に対処するもので、対象地区は立山町新川・日中・上段の３地区である。まず、現地確認を行い、６箇所で遺跡が工区内に含まれている事が判った。立山町辻・浦田西反・日中源兵衛腰・日中竜ヶ浜・新瀬戸古窯跡・越中瀬戸焼窯跡群の試掘調査を実施した。これらの調査結果をもとにして、各々の遺跡の保護措置を講じるための協議を行なった。協議の結果、遺跡を水田下に保存できるように工事計画の一部を変更する事となった。

第Ⅱ期の調査は、昭和54年度に予定されているほ場整備事業計画について、昭和53年度内に対処したものである。この調査は、工事計画案の段階で遺跡が存在すれば、遺跡の保護措置を講じれるような工事計画を作製するというものである。そのため、昭和53年度に予定されていた大部分の発掘調査が終了した秋から冬にかけて行った。現地確認の結果５箇所で遺跡が工区内に含まれている事が判った。その結果をもとに保護措置を講じるための協議を行った。昭和54年度の工事計画では、遺跡は水田下に保存される事となっている。

（橋本）

Ⅱ　地形と周辺の遺跡

立山連峰に源を発する常願寺川は、県南東部に中河川と複合した扇状地形を形成する。この両岸には、発達した段丘地形が観察でき、多数の遺跡が段丘上に存在する。この段丘地形は、東側に著しく発達し特に扇頂部では200ｍ～300ｍの間隔で、２・３段の新旧扇状地形が５～20ｍの比高差をもって、認められる。この段丘最高位の上段（うわだん）段丘は、南北約6.5㎞、東西１～３㎞の細長い卓状台地で、西側に栃津川、東側に白岩川が流れる。段丘上は、小支谷により開析された小丘陵地形が数多く見られる。また、下段（しただん）段丘との間は、比高差５～20ｍの崖となっている。

下段段丘の扇央部から扇端部にかけては、小支谷により開析された小丘陵が数多く見られ、遺跡の多くは、この高台上に立地する。また、扇端部では、中河川と復合した扇状地形がみられ、遺跡は、端部に作り出された、小丘陵、自然提防上に立地する。

下段段丘上に立地する遺跡には、昭和50年に調査が行なわれた金剛新遺跡（縄文中期～晩期）や、岩峅野遺跡などがある。金剛新遺跡〔山本他　1976〕では、後期後葉を中心とする良好な遺物が出土している。また、岩峅野遺跡〔柳井他　1976〕は、中期末の岩峅野式土器の標式遺跡として著名である。

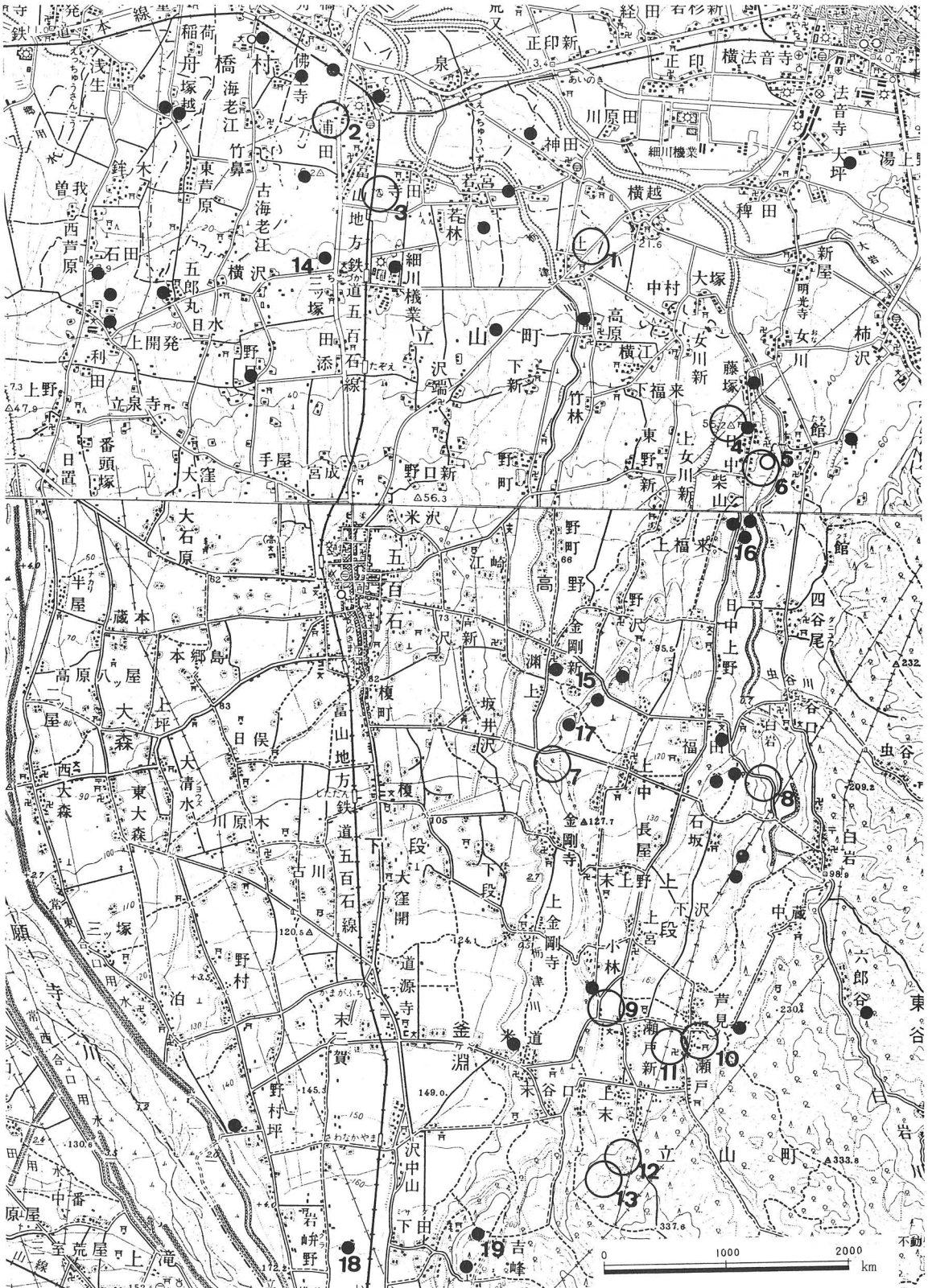
上段段丘に、数多く存在する遺跡は、主として縄文時代に属する。それらは、遺構が数多くみられる日中墓ノ段遺跡〔安田他　1974〕・竜ヶ鼻遺跡〔酒井　1978〕などと、時期幅が短く、遺構・遺物なども少ないキャンプサイト的な遺跡があり、後者が多い。

段丘北端部には、藤塚古墳・日中源平衛腰遺跡や、中世の城跡（日中城）・経塚（日中経塚・日中東経塚・日中玉橋経塚）などが散在する。

上段段丘の南端山裾部には、良質の陶土がみられ、奈良・平安時代の古窯跡群（上末古窯跡・法光時窯跡）や、現在まで断続的に焼き続けられている越中瀬戸焼の古窯跡群が在存する。古窯跡は、約40基あったといわれるが、現在確認されるものは、10基ほどである。

扇状地端部の遺跡は、県下最大の円墳である稚児塚古墳や、縄文時代中期の大集落二ッ塚遺跡をはじめ西反遺跡・辻遺跡などがみられる。遺跡は概して弥生時代～中世に中心をもつものが多いが１～２型式の縄文土器を出土する。このように、常願寺川東岸には、縄文時代から現代に至る各時代を通して人々の生活の場となっていた。

（酒井）



第１図　遺跡と周辺　１．辻遺跡　２．西反遺跡　３．稚児塚古墳　４．源平衛腰遺跡　５．日中城跡　６．日中墓ノ段遺跡　７．竜ヶ兵遺跡　８．月ノ平遺跡　９．新瀬戸古窯跡　10．越中瀬戸古窯跡群第１地点　11．越中瀬戸古窯跡群第２地点　12．法光寺谷古窯跡　13．上末古窯跡　14．二ッ塚遺跡　15．金剛新遺跡　16．日中経塚　17．竜ヶ鼻遺跡　18．岩峅野遺跡　19．吉峰遺跡

Ⅲ　調査の概要

1　辻遺跡

調査期間　昭和53年６月13日～６月16日（延３日間）

地形（第２図）　遺跡は、栃津川東岸の小支谷により開析された微高地上に立地する。この微高地は、南北約１km、東西約500ｍの拡がりをもち、南北にゆるく傾斜している。標高は、21～23ｍを測る。

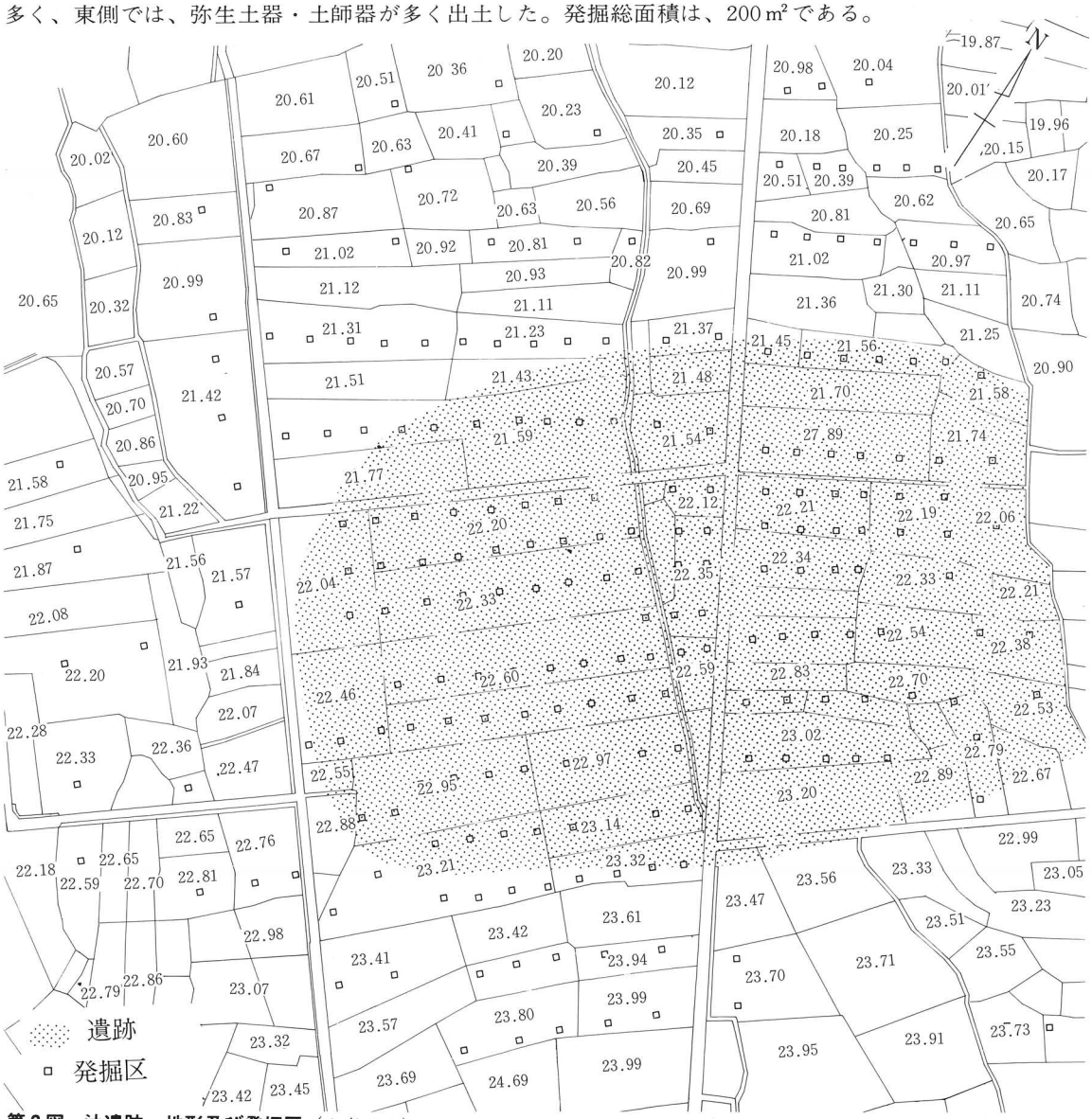
調査の経過と結果　遺跡は、昭和31年水田整地時に発見された。

調査は、ほ場整備対象地区の南から微高地全体に、５～10ｍ間隔の試掘区を設けて行ない、遺跡の範囲・状態を確認することとした。遺物は、微高地のほぼ中央部・東西200ｍ・南北約200ｍ（第２図参照）に多く出土した。

層序は、１層・耕作土、２層・黒色土・３層・褐色粘土層、４層・青色粘土層（地山）と考えられた。

遺物は、２～３層上部から須恵器・土師器、３～４層上部にかけては、弥生土器・土師器が分層的に出土した。また、３～４層にかけては、湧水がみられ、遺構の検出は、極めてこんなんであった。

遺物の分布は、時代により微高地上で異なり、栃津川に面する南西側には、奈良・平安時代の遺物が多く、東側では、弥生土器・土師器が多く出土した。発掘総面積は、200㎡である。



第２図　辻遺跡　地形及び発掘区（1/2,000）

遺物（図版第２　18～28）　弥生時代の土器は、壺・高杯・器台などがある。　18は、胴のいくぶんはる壺で、口辺部に縦位、胴上部に横位、胴下半部に斜位の細かい刷毛目が施される。内面は、やや荒い刷毛目で整形され、粘土帯の接合痕を残す。23は器台で、筒状の胴部にラッパ状に広がる脚部と受部が付くと思われる。脚部には、３～４ヶ所に尖穿されている。24は、細い胴部で、ラッパ状に広がる脚部に皿状の受部が付くもので、胴部内面にしぼり目が残る。荒い作りである。その他に、高杯（22）や脚部（25）がある。25は丁寧な作りである。

須恵器は、蓋・杯・壺・鉢などがある。蓋は、丁寧な作りで偏平な宝珠形のつまみが付けられる。杯は、ゆるく外反する形で、高台が付く。壺は、胴部に一条の沈線が引かれ、高台が付く。高台は、両者とも、外へ強くふんばる。８世紀後半のものと考えられる。その他に、縄文土器・磨製石斧・珠洲焼片などが、若干出土している。　（酒井）

２　浦田西反遺跡

調査期間　昭和53年７月24日（延１日間）

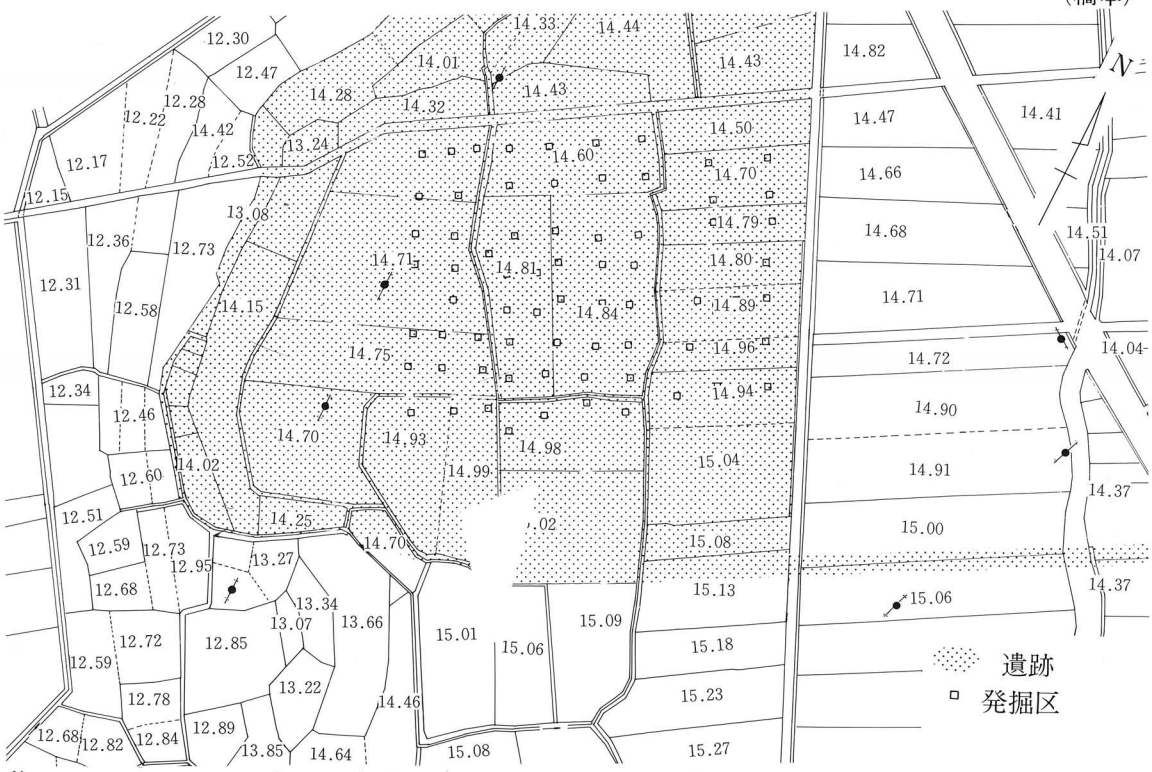
地形（第３図）　遺跡は常願寺川扇状地の末端部で、南北約１km、東西約500ｍの舌状小丘陵上に位置する。丘陵の両側（東西）は、小支谷が入り込み約２ｍの比高差をもつ。標高は、約15ｍを測る。

この丘陵には、以前から水田耕作時に遺物の出土があり、地点を異にしながら数ヶ所の遺跡が存在していると考えられ、調査地点の東と南側にも拡がっていると思われる。

調査の経過と結果　遺跡は、ほ場整備工事中に発見されたため、一部で面工事が終了しており調査対象地区は、１部分だけとなった。調査は、1ｍ×1ｍの試掘区を、５～10ｍ間隔に設け行った。　調査後に遺跡の保存措置を講じたのは、台地北側の約9000㎡である。調査の結果、西反遺跡は、縄文時代と古墳時代と中世に営まれた集落跡と判った。遺構としては、柱穴状の穴が確認された。

遺物（第２図29～36）　遺物では、古墳時代初頭に位置づけられる土師器の出土量が一番多い。器種では、壺・甕・高杯・器台・蓋・甑形土器がある。29は、鉢形土器の小形品である。30・31は蓋で、つまみを有する。32は、甑で、焼成前の穿孔である。33、34は、高杯の脚である。34は、脚柱部より「八」の字状に広がる裾部がつく。時期は古墳時代初頭で、塚崎遺跡の編年成果〔吉岡　1976〕によれば、塚崎Ⅱ式に平行すると思われる。35は、須恵器の杯で、口縁部は斜め上方に伸びる。36は、スリ鉢の底部である。この他に縄文時代晩期の土器・石器、奈良～平安時代の土師器・須恵器、中世の珠洲陶がある。

（橋本）



第３図　西反遺跡　地形及び発掘区（１/2,000）

3 稚児塚古墳

調査期間　昭和53年10月２日～10月３日（２日間）

地形　（第１図・第４図）　稚児塚古墳は、立山町浦田字前田185番地に所在する。この一帯は、常願寺川と白岩川によって形成された扇状地の末端部近くにあたり、標高約15～16m を測る。古墳の南側には、小河川が流れその流路にそって形成された微高地上に古墳は築成されている。

調査の経過と結果　（第４図・図版第１の１・２・３）稚児塚古墳の墳丘周囲の水田は、幅約15～17m で円形をなしてめぐることから、古墳に伴う周濠と考えられている。調査は、その確認を目的として水田の外辺部にそって、１m × ５～15m のトレンチを各々20～50m 間隔に設定する方法によった。その結果は次のとおりである。

①墳丘の周囲をとりまく水田のうち、南半分にあたる部分は、耕作土（約15～20cm）下に地山面（黄褐色砂質土）があり、その外側の水田とは約70cmの比高差をもって高くなっている。②北半分にあたる部分は、耕作土面下約70cmに地山面があり、黒色土の厚い堆積が認められる。その外側水田の地山面と比べ約20cm低く、人為的に掘りくぼめたものと推定される。その境界は、周囲水田の外側の輪郭とほぼ一致する。黒色土中には、珠洲、越中瀬戸が含まれ、埋没の時期を示唆する。③以上の状況からみて、稚児塚古墳は、墳丘周囲の南半分を平担に削り出しテラス状に、北半分は掘りくぼめて周濠状に造り出しているものと考えられる。両部分がどのように接続するのかについては不明である。

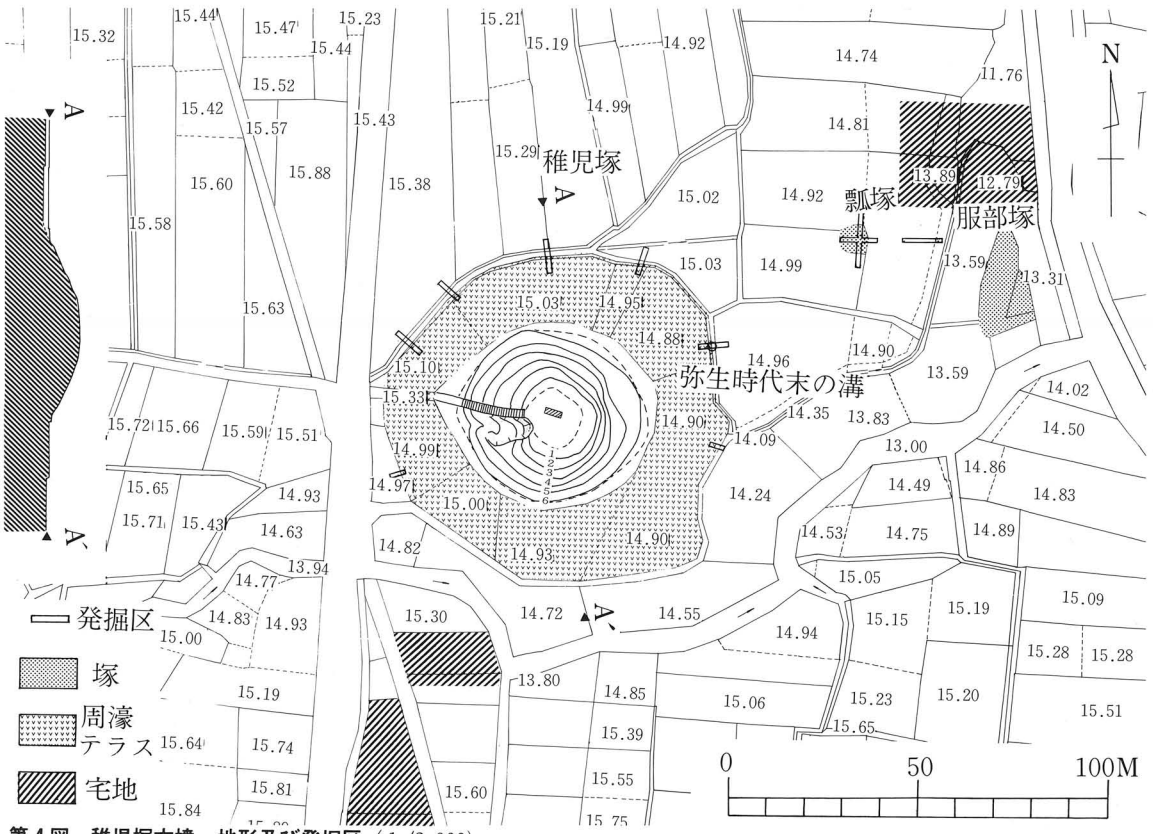
調査中、古墳の東方水田に、瓢塚、服部塚という二つの塚が存在していたことを、地元民から知らされ、また古墳の西側に設けたトレンチに弥生時代の溝状の遺構が検出された〔図版第１の２〕。そのため、東方一帯に新たな遺跡が広がっていることが予想され、ひきつづいてその確認のための調査を行なった。その結果は、次のとおりである。

①服部塚は、排水路の改修によってすでに破壊されており、瓢塚は耕作土直下にわずかに周溝状のものをとどめている。時期は不明であるが、周囲の出土遺物から中世以降の可能性が強い〔図版第１の３〕。②弥生時代末の溝状の遺構は、他に１カ所確認され、この時期の遺跡が、古墳の東方一帯に広がっていることが明らかになった。

出土遺物　縄文土器・弥生土器・須恵器・珠洲・越中瀬戸

遺構　古墳の周濠、弥生時代末の溝状の遺構２カ所、瓢塚の周溝

（久々）



第４図　稚児塚古墳　地形及び発掘区（1/2,000）

4　日中源平衛腰遺跡

調査期間　昭和53年６月21日～６月22日（延２日間）

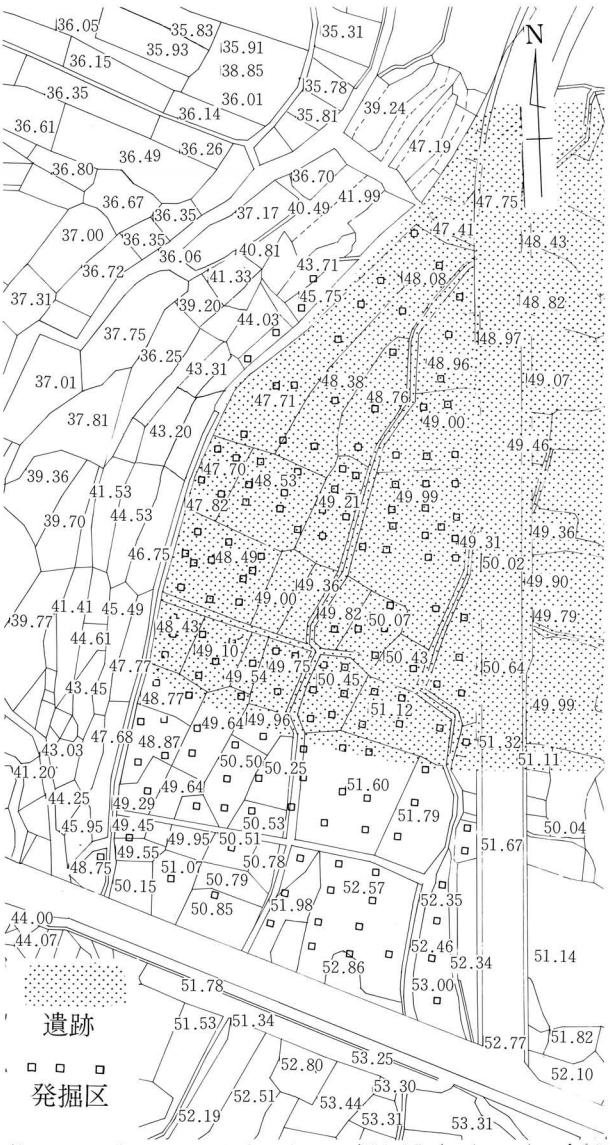
地形（第５図）　遺跡は、上段段丘末端部東側に白岩川が接して流れる。その段丘上に開析された西側の小丘陵上に立地する。丘陵の中央にスーパー農道が布設されており遺跡は、その両側に拡がる。また相対する小丘陵上には、藤塚古墳がみられる。下位段丘との比高差は、東側で約５ｍ、西側で約10ｍである。また標高は、52ｍを測る。

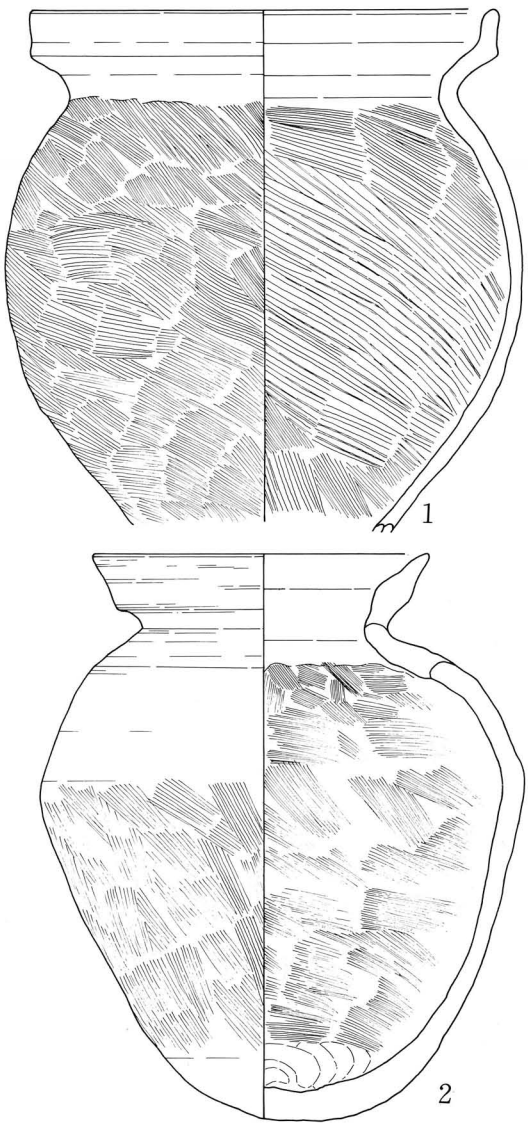
調査の経過と結果　調査は、丘陵の中央部を通るスーパー農道の西側約2000m²を対象として５～10ｍ間隔に試掘区を設け、遺跡の状況・遺物の分布範囲を確認した。遺物は、丘陵の端部から中央部にかけて約150mの範囲で認められ、縄文時代の遺物は主に丘陵中央部に集中し、土師器は、丘陵のほぼ全域から出土した。

層序は、１層・耕作土、２層・黒色土、３層・茶褐色土、４層・黄褐色土（地山）であった。また、丘陵の先端部、付け根部では、整地のため削平されており、耕土の下は地山層であった。遺物は、２層から土師器、３層から縄文土器が多く出土した。

遺構は、古墳時代の住居跡と考えられる張り床を２ヶ所、穴を１ヶ所で確認した。総発掘面積は、157m²であった。

遺物（第５図　１・２、図版第３　６）　縄文時代の遺物は、早期末から前期初頭の極楽寺式〔小島





第５図　日中源平衛腰遺跡　地形及び発掘区（1/2,000）　**実測図**（1/3）

1966〕の土器・石器、前期後葉・中期前葉の土器が出土している。早期末～前期初頭の土器は、外面に羽状縄文や押圧縄文を施し、内面に貝殻腹縁による条痕文を施すもので、胎土には、繊維が混入される。器形は、深鉢形の尖底土器と思われる。前期後葉の土器は、細い粘土紐を貼り付け、その上に細かい爪形文を施すものがある。中期前葉の土器は、厳照寺Ⅱ式〔神保　1977〕と思われるB字状の入り組み文様が施される。その他に浅鉢も出土している。

縄文時代の遺物は、早期末～前期初頭の遺物が主体で、その他のものは少ない。

土師器（第5図　1・2）は、いくぶん荒い刷毛目を内外に施す1と、細い刷毛目を施す2がある。1は、口縁が外反して立ち、胴がはる甕で、作りもしっかりしている。2は、口縁が肥厚し、ゆるく外反するもので、胴部にゆるい段をもち、いくぶんはる。底部は丸底で、内面には、ヘラ削りの痕跡を残す。両者は、いくぶん時期差をもっと考えられる。　（酒井）

5　日中城跡

調査期間　昭和53年11月29日～12月4日（延3日間）

地形（第6図）

日中部落の東郊にあり、白岩川の左岸に形成された上段段丘の、北端部の東縁に位置する。標高は約58mである。城跡の東側は急峻な崖となっており、崖の直下を白岩川が流れている。白岩川との較差は約17mである。なお、城跡の南方約250mに日中墓ノ段遺跡がある。

城跡の概略

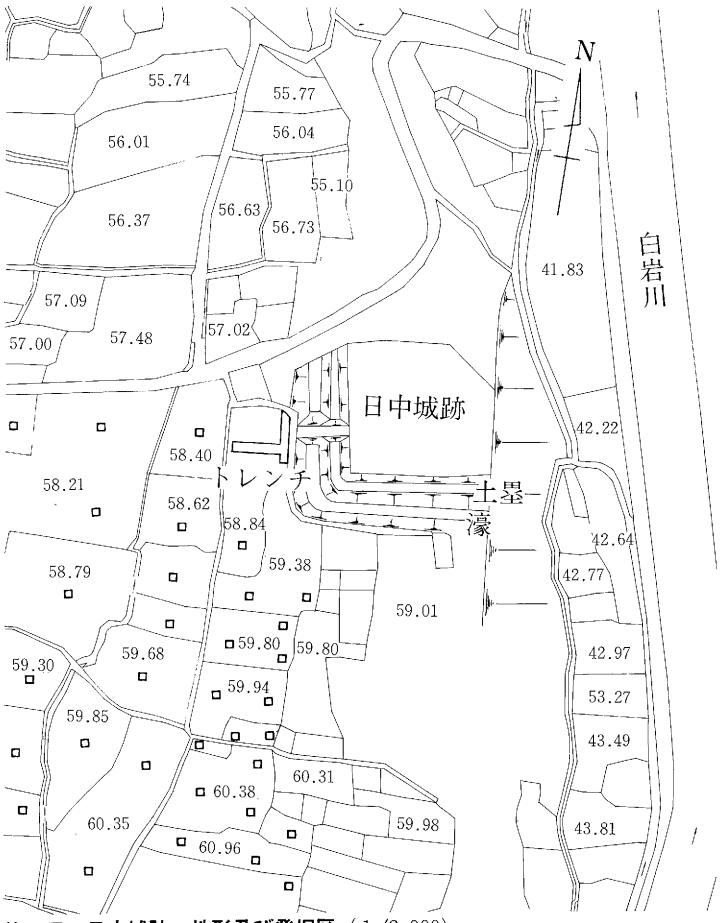
この城跡は、『富山県遺跡地図』によれば、「日中土塁」として登載されている。これは、城跡に遺存する土塁を採って遺跡名としたものである。ここでは、日中城跡として取りあげる。

城の構造は、単郭・単濠から成る。土塁の内側は、明治時代以降、共同墓地となっており、今日に至っている。土塁・濠は南・北・西側の三方に巡らされており、遺存状況はきわめて良好である。東側つまり白岩川に面する部分は、自然の崩壊が著しい。地形からみて、天然の要害にふさわしい急峻な崖であることから、東側にはもとから土塁・濠は存在しなかったものと推定してよいであろう。西側のやや南寄りには、1ヶ所、出入口がみられ、濠には土橋がかけられている。規模は、濠の外側で南北約55m、東西約60mで、平面形は方形を呈する。

さて、城跡の東方、上市町柿沢館には、土肥政繁の居城であった弓庄城跡が存在する。日中城は、天正11年4月、佐々成政がこの弓庄城を攻めるために築いたものといわれ、いわゆる付け城に属するものである。

調査の経過と結果

ほ場整備計画によれば、墓地となっている城跡は、当然、工区外とされていた。したがって、城跡は、今回の試掘調査の対象とはしなかった。ただし、城跡の西側に、農道が取りつけられる計画であるので、この部分にT字形のトレンチを設定した。トレンチは、南北12.5m、幅3m、東西13m、幅2mである。遺構・遺物は検出されなかったが、城跡寄りの部分に厚い黒色土層がみられたことが、注意をひいた。また、西側の水田には、1m×1mの試掘区を設けたが、遺構・遺物は検出されなかった。　（岸本）



第6図　日中城跡　地形及び発掘区（1/2,000）

6　日中墓ノ段遺跡

調査期間　昭和53年11月27日～12月４日（延４日間）

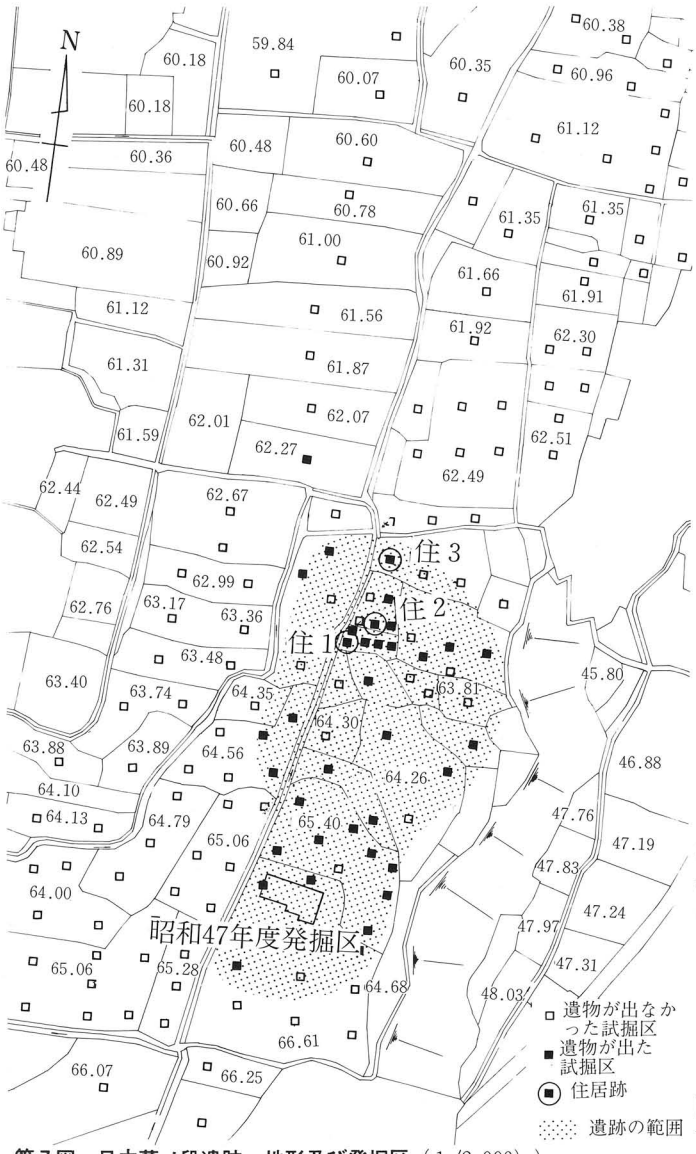
地形（第８図）

白岩川の左岸に形成された上段段丘の北端部の東縁に位置する。前節で述べた日中城跡とは同一の丘陵上にあり、その南方約250ｍにある。遺跡の東側は、崖となっている。

調査の経過と結果

この遺跡は、過去に発掘調査がなされており、こんにちでは、吉峰遺跡・二ッ塚遺跡などとならんで立山町内の代表的な縄文遺跡となっている。過去の発掘調査は、昭和47年に岡崎卯一氏を指導者として立山町文化財保護委員会が中心となって実施され、調査の成果も公刊されている〔安田　1974〕。その発掘調査区は、第８図中に示したとおりである。

今回の試掘調査は、昭和47年の調査地点を中心として、その周辺全域を対象とした。調査は、１ｍ×１ｍの試掘区を10ないし20ｍ間隔に設けるという方法を採ったが、遺物が出土した地区については、その間隔を密にした。遺物の出土範囲は、第８図に示したごとくほぼ限定され、これによって遺跡のおおよその範囲を推定しえた（第８図）。すなわち、遺跡は、日中部落の南東に広がる水田の、その高位部を中心として形成されている。



第７図　日中墓ノ段遺跡　地形及び発掘区（1/2,000）

また、今回の調査では、昭和47年調査地点の北方約70ｍの地点で住居跡群があることを確認し、この地区に遺跡の中心の一つがあることを明らかにしえた。すなわち、三ヶ所の試掘区で住居跡内の貼り床を確認し多数の縄文土器（第８図）の出土をみるとともに、内１ヶ所では、石組炉を検出した（図版４の４）。石組炉は、６個の河原石を楕円形に配したもので、長径45cm、短径40cmをはかる。

なお、この住居跡群は、出土土器から判断して縄文時代中期中葉に属するものである。

この遺跡には、このほか少くとも数棟の住居跡が存在するものとみて、ほぼ間違いないであろう。このことは、遺物の出土範囲の広がりに加えて、今回の出土土器が、中期中葉を中心として中期後葉、後期初頭の気屋式と時期幅をもっていることからも首肯されよう。また、遺跡の北東、すなわち日中城跡南方の畑で縄文時代前期の土器片を表面採集しているので、この丘陵上には、地点を異にしながら前期から断続的に縄文人が居住したことを窺い知ることができるのである。

（岸本）

遺物（第８図、図版第４）

縄文時代中期中葉～後期初頭・晩期前葉の遺物が出土している。中でも中期中葉　天神山式〔湊他　1959〕に類する土器は、その文様から大きく三つに分類できる。いづれも大きく口縁の開く深鉢である。

Ａ種（第８図　１、図版第４　14）

渦巻きをもつ基線隆帯を文様基線として、竹管文・三叉文様を組み合せ、基線隆帯の間を埋めるもので、同下半部は垂下する竹管文となる。１は、基線隆帯を

斜めに下げ、その間に三叉文・竹管文を施し、ヘラ状工具により刻む。しかし、隆帯上には、文様を施していない。文様構成は、A＋A′＋A″の３単位である。14は、ほぼ同様の文様構成で基線隆帯に瓜形文を施す。

B種（図版第４　15）

渦巻きをもつ基線隆帯を斜行させ、半裁竹管による連弧状文を施し、隆帯上は、ヘラ状工具により刻む。A、C種の中間的様相をもつ。

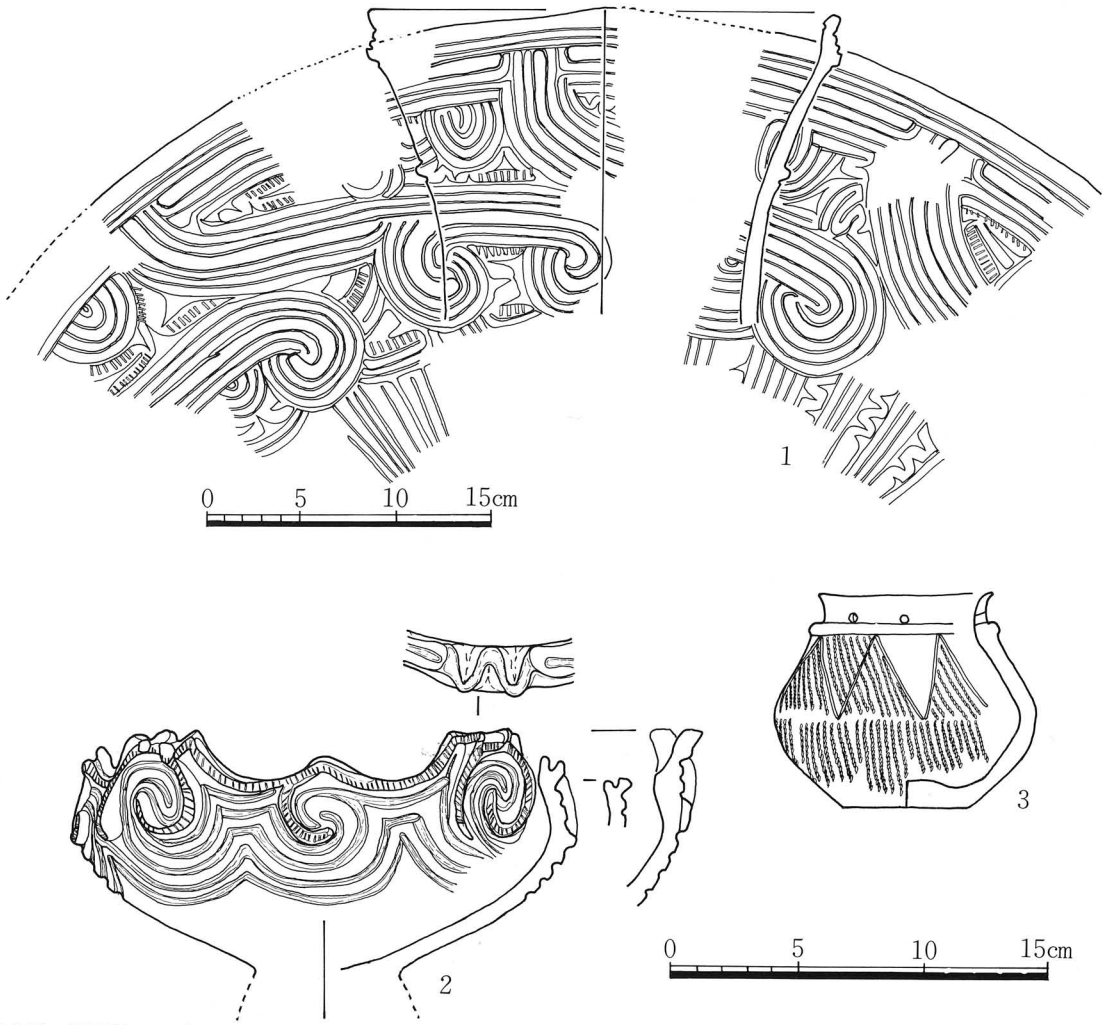
C種（図版第４　13・16）

胴上部を横帯区画に区切り、基線隆帯を弧状に施して、その間を竹管文で連弧状に描く16や、蓮華文様状に描く11がある。A・B・C種は、同時期と考えられる。

図版第４の12は、台付きの鉢で半裁竹管により連弧文様を描き、隆帯上をクシ状工具により刻む。また、口縁部には、突起が付けられている。第８図の３は、有孔鍔付土器で胴上部に三角文様を描き交互に撚糸文を施す。内外面には、朱の痕跡を残す。第８図の２は、台付きの舟形土器で口縁部に、大小の突起を交互に付け、隆帯上はクシ状工具で刻む。また、大木式系の土器（図版第４　５・６）がある。

中期後葉に属する土器は、串田新式（小島　1964〕の図版４の７・９や、中期末葉の岩峅野式〔柳井　1976〕などが若干出土している（図版４の11)。そのほかに後期初頭の土器として、気屋式土器（図版第４の６）などが出土している。石器としては、磨製石斧・打製石斧・石錘等が、出土している。また、今回調査した地点は、縄文時代中期中葉を中心とする集落跡と考えられ、中期後葉の土器の出土は、少量であった。

（酒井）



第８図　実測図　１（1/4）２・３（1/3）

7　日中竜ケ浜遺跡

調査期間　昭和53年７月10日～７月12日

地形（第１図）　上段段丘中程の西縁部にみられる。北東に突出する舌状台地上に所在する。

調査の経過　遺跡は、過去に安田良栄氏により縄文時代前・中期の土器・石錘・石斧等が採集されている〔安田1977〕。谷向いの舌状台地上には、竜ケ畠遺跡があり昭和52年には県教委の調査〔県教委1978〕が行われ、縄文時代中期の住居跡などが確認された。そこで、本遺跡でも住居跡などの存在が予想されたが、今回の調査では、遺構・遺物が確認できなかった。(橋本)

日中龍ヶ浜遺跡

8　月ノ平遺跡

調査期間　昭和53年12月５日（延１日間）

地形　石坂土取場遺跡の東方、上段段丘の東側斜面に立地する。

調査の経過と結果　遺跡といわれる畑に、試掘区を35ケ所設定した。いずれの地点も耕土直下に地山がみられ、遺物包含層は認められなかった。この畑は、採土後の平坦地に耕土を搬入して作られたといわれる。この点から遺跡は、採土により消滅したものか、あるいは搬入された土中に遺物が含まれていたものとすれば、もともと遺跡は存在しなかったことも考えられる。

（岸本）

白岩月ノ平遺跡

9　新瀬戸古窯跡

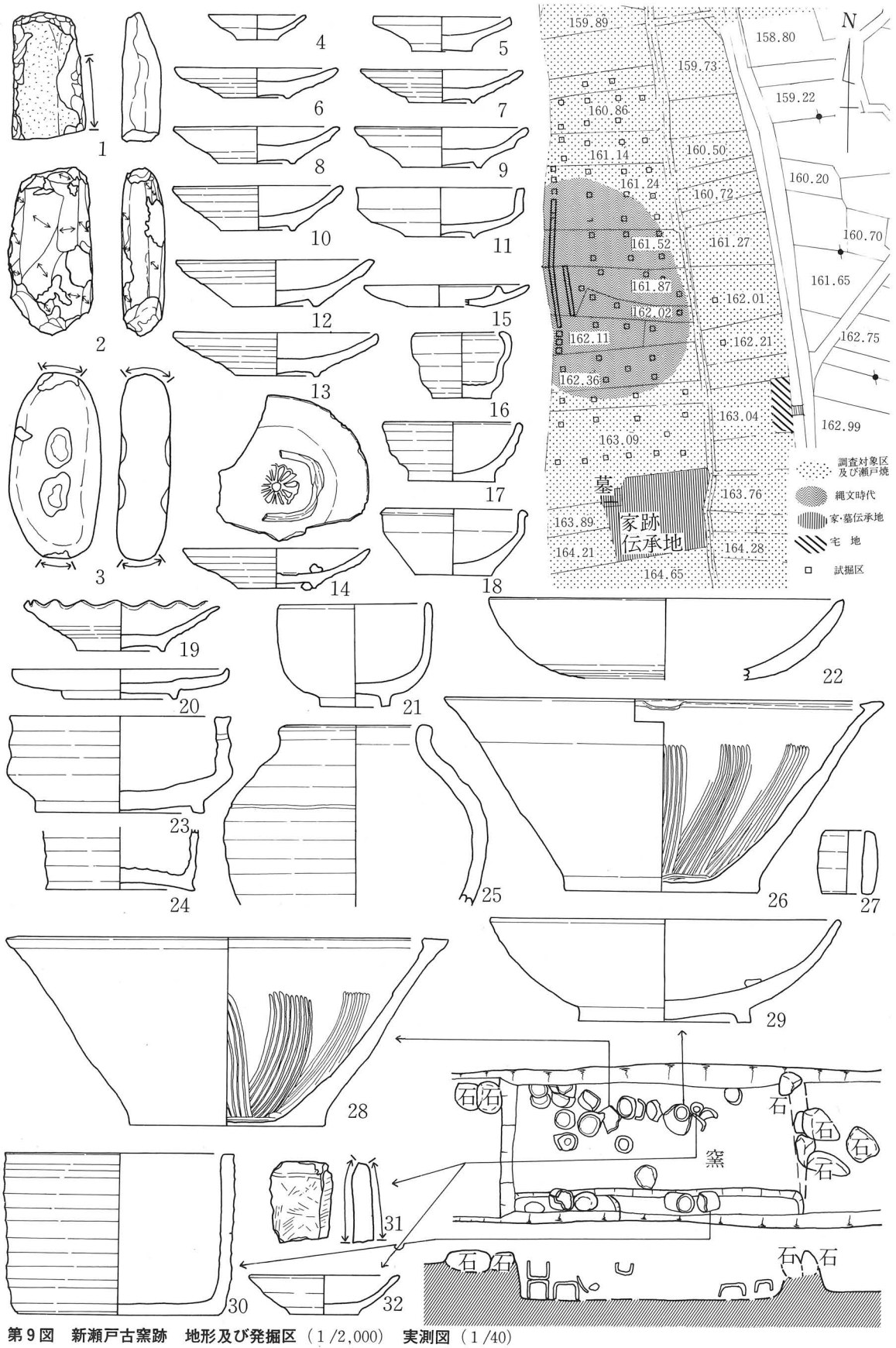
調査期間　昭和51年７月19～７月21日　（延３日間）

地形　（第９図右上）　立山町の東には、上段段丘がありその南奥の西側崖沿いに遺跡が所在する。崖は急で、崖下との比高差は約40mある。段丘上は平坦で、北に向ってゆるやかな傾斜を持ち、標高は約180mである。

調査の経過と結果　調査対象地区一帯は、越中瀬戸焼の古里として古くから知られているため、現地の方々から窯場の聞き取りを行った。その場所を中心に、崖斜面と崖際を踏査して未製品の捨場を確認した。これらの調査結果から、窯の場所を推定し、その地点を中心にして1m幅のトレンチを崖に沿って設けた。同時に、1m×1mの試掘区を周囲に設定し、その他の遺構の有無を調査した。調査の結果、崖際のトレンチから江戸時代に属する越中瀬戸焼の窯ノ基と同様の窯と考えられる遺構（窯の改築のため壊されている）と時期・性格不明の穴を確認した。窯については、東側に伸びているかを知るためのトレンチを約５m離れて設けたが、ここでは確認できなかった。

越中瀬戸焼窯については、今日までいくつかの研究成果（〔林1960〕〔定塚1974〕他）があり、それらの研究成果より、本窯は「九佐衛門窯」と推定された。立山町では、製作者と窯が一致しているもので、保存措置がとられている例が少ないため、本窯は砂を入れて保存した。現在は、農道と水田の下で眠っている。九佐衛門窯については、開窯年代などを記した古文書（図版第５の４）が、加藤星照氏宅に保管されているため、写直撮影を行った。調査中、本窯についての説明を現地で行った。

遺構（図版第９の右下）　九佐衛門窯は、1m幅のトレンチ内で検出しただけで、窯の全容は確認しなかった。窯の平面形は、方形を基本とし、2m×3m程度の規模と思われる。北側の壁が良好な状態で残っており、窯底部より約20cmの立ち上がりを持つ。壁には、人頭大の石・小石・粘土を用いて構築している。天井部も同じであるが、くずれ落ちている。焼成室内面の壁は、高温と灰によりガラス状となっている。窯底部は平坦で、これもガラス状となっていた。底部の南北幅は、1.8mある。窯底部西側は、約10cmの段差を持って落ちる。これは、焚口に関係すると思われる。窯の底面には、厘鉢（さや）・スリ鉢・小皿などがあり、底面に付着しているものもある。本窯の形態としては、半地上式の胴（どう）窯と考えられる。この形式の窯としては、甚兵衛窯があり、同じと考えられる。



第９図　新瀬戸古窯跡　地形及び発掘区（１/2,000）　**実測図**（１/40）

遺物（図版第９の１～32）　遺物では、縄文時代前期・晩期に属する土器・石器がある。１は打製石斧、２は磨製石斧、３は凹み石である。

江戸時代の遺物では、越中瀬戸・石器・窯道具がある。これらは、窯内部と未製品捨場と周囲から出土した。28～32は、窯底部にあった資料である。７～10、12～14、19、32は、小皿の類である。４・５は、小形品で、ヘラによる削り出し高台を持たず平底である。19は、口縁部を指でつまみ、波打たせている。32は、窯から出土し、泰焼で平底である。小皿の類は、口縁部を指でナデて丸く終らせる。また、紬薬を全面には塗らず、底部と胴部下半を除く例が多い。14は、窯の周囲から出土し、内面に菊花文を持つ。花弁は14である。16～18・21は、茶碗の類である。20は大皿で、口縁端部が強く掘曲して直上する。22・26～28は鉢で、26・28はスリ鉢である。スリ鉢の底部は平底で、薄い。口縁部は断面が三角形に近くなり、内側に伸びる。25は壷で、27は陶錘である。29は窯内からの出土で、大形の皿である。内面には、「マメ」と呼ばれる重ね焼き用の粘土が千個付着している。23・24・30は、匣鉢と呼ばれる窯道具である。31は、砥石である。釉薬は、灰釉系と鉄釉系の２者があるが、後者のものが多い。この他に、越中瀬戸の天目、黄瀬戸や緑釉系のものなどがある。本窯とその周囲からは、徳利・水指・花瓶などは出土しなかった。これらの越中瀬戸の大部分のものは、本窯の周囲からの出土であるため、これをもって本窯の年代となしえないが、参考となる。越中瀬戸の時期は、江戸時代中期と思われ、本窯の年代についても同じと考えられる。　（橋本）

10　越中瀬戸窯跡群（第１地点）

調査期間　昭和53年７月17日～７月18日（延２日）

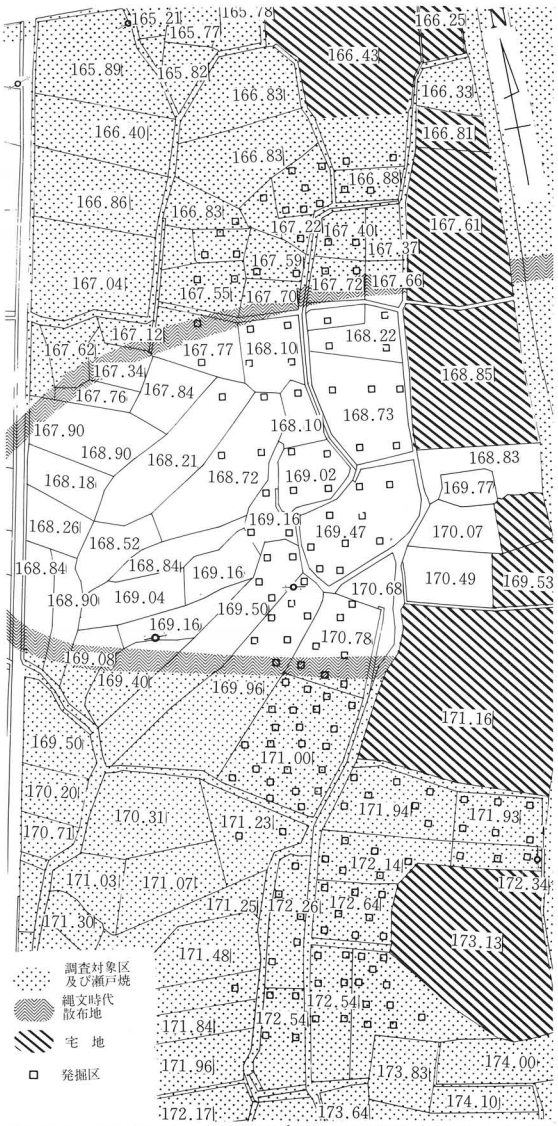
地形（第10図）　遺跡は、上段段丘の南奥にある瀬戸地区に所在し、周囲より少し高い微高地上にある。標高は、165m～172mを測る。

調査の経過と結果　遺跡は、今日まで、芦見から瀬戸地区にかけて広がっている〔安田1977〕とされている。今年度の施工区は、瀬戸地区の西側であるため、その部分を調査対象区とした。調査は、1m×1mの試掘区を用いて行った。調査の結果、瀬戸地区の中程から西に伸びる微高地を中心に縄文時代の遺物が散布している。越中瀬戸は、芦見、瀬戸両地区一帯にみられ、試掘区の大部分から出土した。

縄文時代の遺物では、後期に属する土器と磨製石斧・剝片などが出土した。江戸時代から現代にかけての越中瀬戸では、小皿・皿・鉢・スリ鉢・茶碗・陶錘・瓦・窯道具（匣鉢・焼き台地）が出土した。これらの他に、急須・壺類などがみられるが、点数的には少ない。釉薬では、灰釉系のものより鉄釉系の例が多い。色調では、黒色（天目）・茶褐色・茶色・黄色・黄緑色のものがみられる。これらの遺物の大部分は、江戸時代後期に属すると思われる。

遺構としては、明治時代に属する瓦焼場に関係する黒色土（木炭・灰・焼土が混入）の落ち込みが確認された。当地の方々の話しによれば、瓦場であるらしいが、捨場と考えられる。この他に、時期不明の穴が２個所でみられた。

本遺跡の周辺では、いたる所で越中瀬戸焼窯とそれに関係する遺構・越中瀬戸がみられるため、大規模開発を行なえば、保護措置を講じる事は難しいと考えられる。しかし、今回の調査では、地元の方々の御理解を得て縄文時代の遺物散布地を中心として水田下に保存することが出来た。　（橋本）



第10図　越中瀬戸古窯遺跡群（第1地点）**地形及び区割図**（1/2,000）

11　越中瀬戸窯跡群（第２地点）孫市窯跡伝承地

調査期間　昭和53年12月７日～12月25日　（延10日間）

地形　（第13図）　白岩川の源流西岸にある城山から南へ派生する山塊の西北末端にあり、下瀬戸部落東側の台地上に立地する。地目は水田で、窯跡伝承地は東側が一段低く、上下二段に分かれる。

調査の経過と結果　試掘調査に先だち、地元の古老の案内をうけて、まず窯跡伝承地の踏査を行った。その結果は「越中瀬戸焼窯跡分布図」〔定塚1974〕とほぼ符合するものであった。踏査した伝承地のうち、ほ場整備の工区内に明らかに含まれるものは孫市窯跡であったので、この地区を試掘調査の対象に選定した。また、その東側の一段低い田（下瀬戸村中24番地）は、〔山本1934・定塚1974〕によれば、市右衛門窯跡[注1]とされているので、この田をもあわせて調査した。調査では、上記の両伝承地に幅２M、長さ８～20Mのトレンチを計10本設定した（第13図）。その結果、孫市窯跡伝承地に設けた第１トレンチの北東隅において、連房式登り窯の窯室の一つを検出した（第14図）。窯室はその基底部のみが遺存していたが、その規模は東西3.6m、南北2.6mである。窯はほぼ南北に主軸をもつとみなしうるが、検出した窯室は、台地上に占める位置から考えておそらく第１窯室あるいは第２窯室と推定される。発掘は検出した窯室の最上面でとどめたが、窯室内にはかなりの数のサヤが遺存している。また瓦の破片も若干みられたが、これによってこの窯を瓦窯とはみなしがたく、これは窯を被っていた屋根瓦であろうと思われる。

越中瀬戸の窯は、少数の連房式登り窯と多数の胴窯から成るが、前者は、特定の窯元のみが操業したといわれる。孫市窯もそうした窯元の一つと考えられる。

今回検出した窯室は、孫市窯跡伝承地と合致することから、孫市窯跡そのものと考えてほぼ間違いないであろう。

孫市窯は、慶長年間の開窯以来明治45年まで操業されたといわれる。今回検出した窯跡は、窯室内の発掘をひかえたため出土遺物による年代判定はしえないが、最終段階に操業されていた窯が遺存したものと考えるならば、その築窯の時期は江戸時代後期と推定しえるかもしれない、

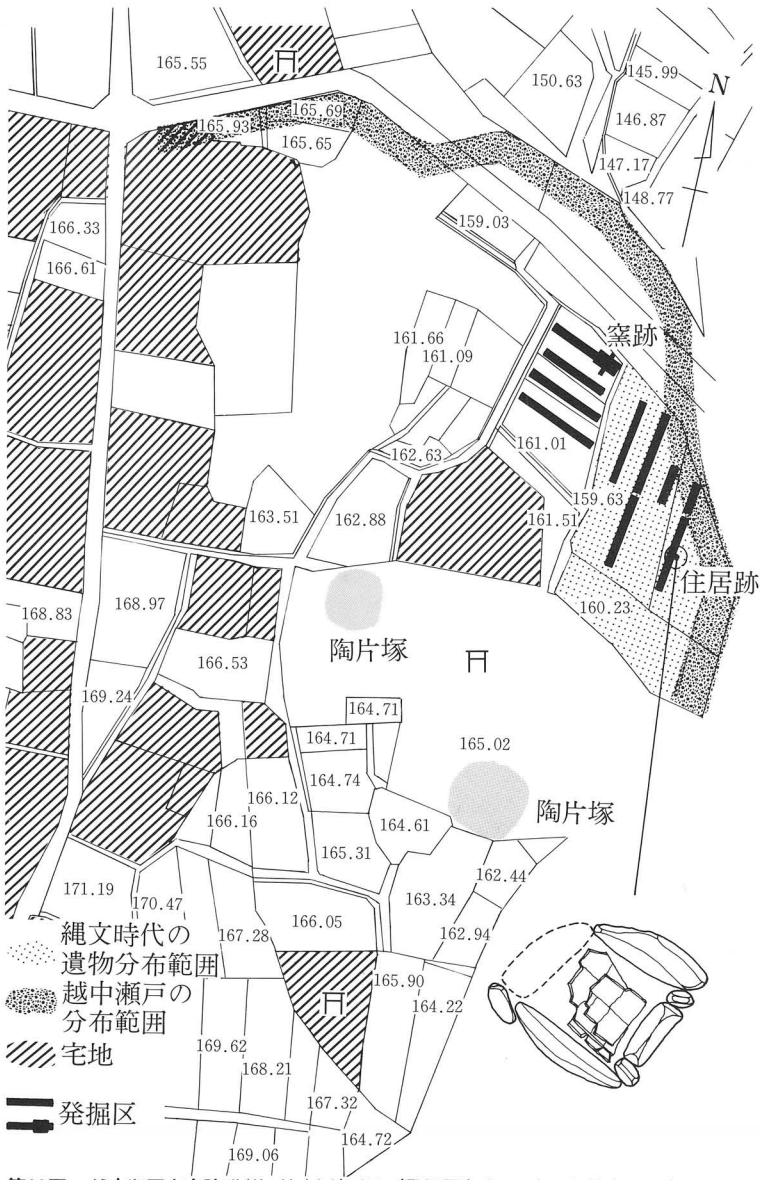
さて、東側の一段低い田においては、窯跡は検出できなかったけれども、多数の越中瀬戸の破片が出土した。とくに、第６トレンチでは夥しい砂片の出土をみ、物原に近い状況であった。これらの出土遺物が、市右衛門窯に伴うものか、はたまたある段階の孫市窯に伴うものか、現時点では速断しえないが、後者の蓋然性がより大であると考えている。

なお、今回の調査では、孫市窯に隣接して存在したといわれる孫市瓦窯跡は確認しえなかった。

遺物（第13図）

出土遺物には、越中瀬戸片をはじめ、陶錘や各種の窯道具がある。

第13図には、越中瀬戸を図示し

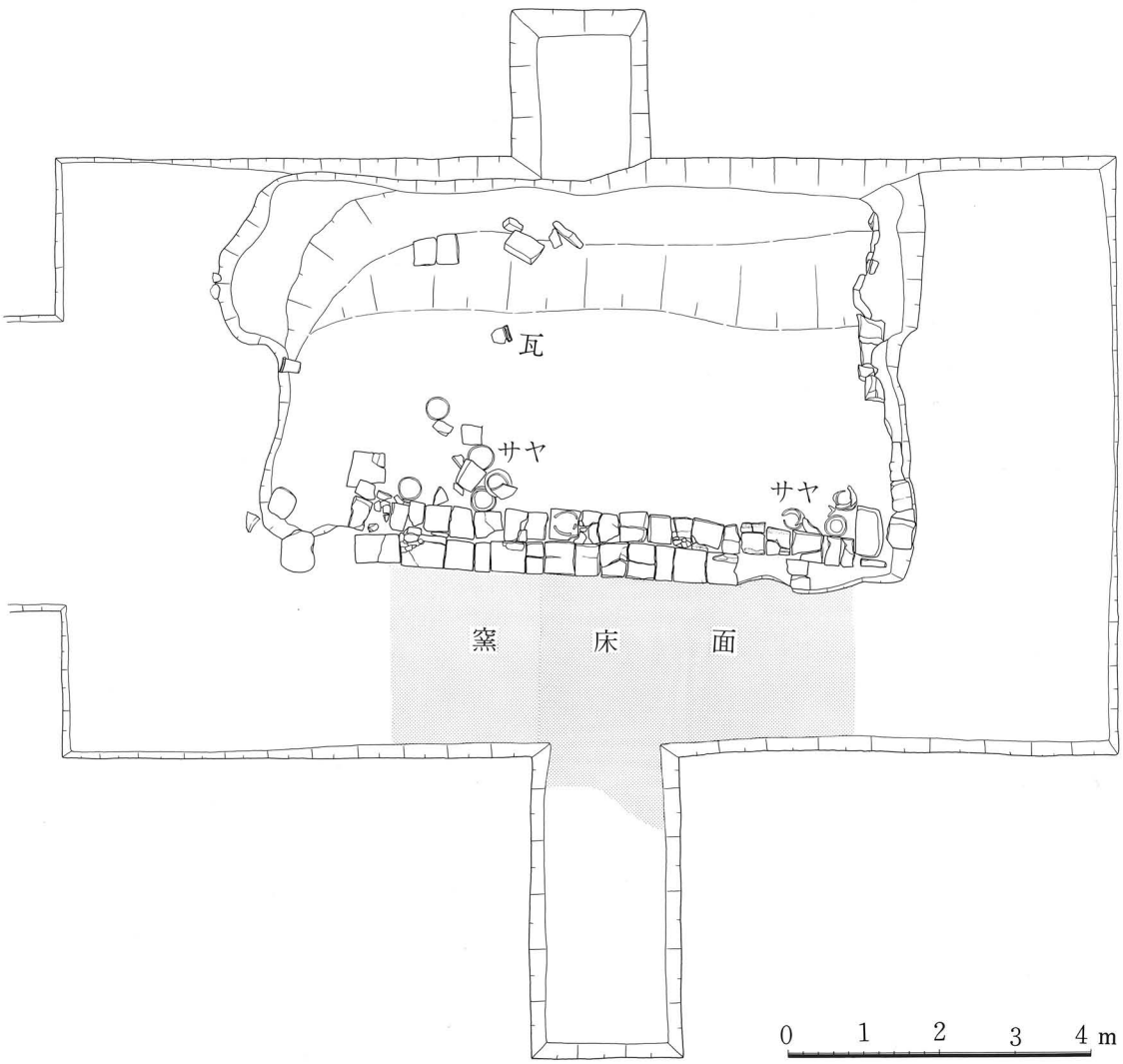


第11図　越中瀬戸古窯跡群（第2地点）**地形及び発掘区**（1/2,000）　**炉跡実測図**（1/20）

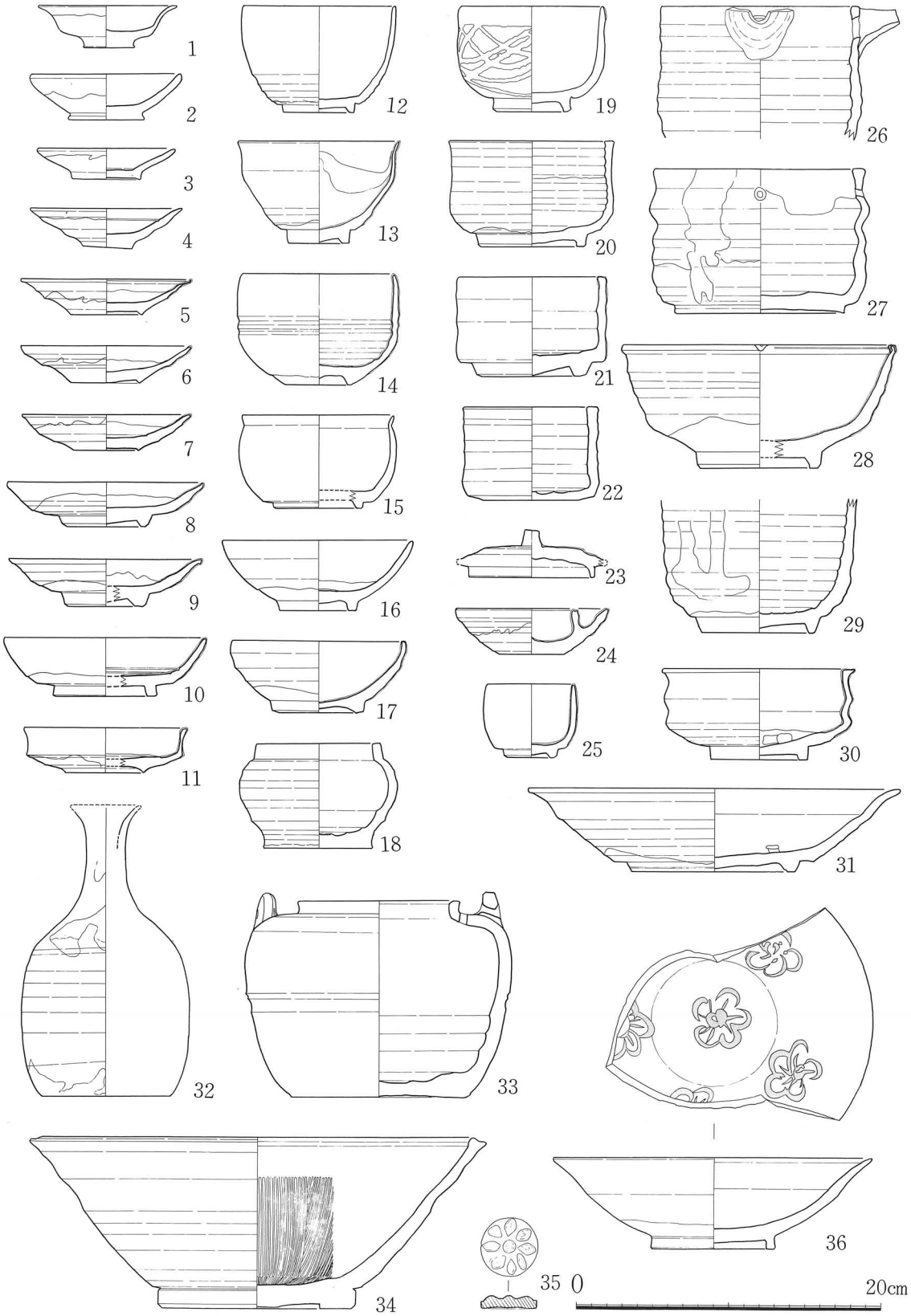
た。器種には、小皿（1～11）・徳利（32）・碗（12～22）・片口碗（26）・鉢（28・29）・大皿（31・36）・スリ鉢（34）などがある。小皿には、高台付と無高台の二種がみられるが、いずれも内外面とも上半部に茶色の鉄釉をかけるものが多い。碗の中には、13のように、天目風で古い感じを受けるものもある。内面に梅の花柄をもつ大皿（36）は、胎土も他の製品とはやや異っており、注意をひく。スリ鉢（34）は、内面の全地面にわたってオロシ目をもつ。

註1　地元の古老の教示によれば、市右衛門窯は、孫市窯伝承地の南東の杉林の中という。〔定塚1974〕の窯分布図とは符合するが、番地については違いが生ずることになる。なお、長吉窯跡も〔山本1934〕ほかによれば、市右衛門窯跡と同じく村中24番地となっている。この点については、更に検討を要する。（岸本）

縄文時代の遺構及び遺物（第11図）　遺構・遺物は、第10トレンチの中ほどに発見された。遺構は、大形の細長い偏平な河原石を組み合せて作る石組炉の1部で、その検出状況から複式石組炉になると思われる。炉内には、土器片が、二重に敷かれている。このように、大形の河原石を利用し、炉内に土器片が敷かれる炉の形状は、縄文中期後半の特徴と考えられ、二ツ塚遺跡〔橋本他・1978〕などでも多数検出されている。遺物は、炉内とその周囲の黒色土内から多く出土した。この黒色土は、住居跡の覆土と考えられたが、住居跡のプラン、柱穴などは、検出できなかった。土器は、中期後葉の串田新1式〔小島1964〕に属する。（酒井）



第12図　窯跡実測図（1/50）



第13図　越中瀬戸ほか実測図（1/4）

12　法光寺谷古窯跡

調査期間　昭和53年12月25日（延 1日間）

地形（第14図）　古窯跡は、上段段丘の南端山裾部にある法光寺谷の北側斜面に位置する。窯跡は、数年前の粘土採掘によりその１部が破壊されたが、現在でも数基が確認できる。しかし、灰原はほぼ全壊し、須恵器片が散在している。

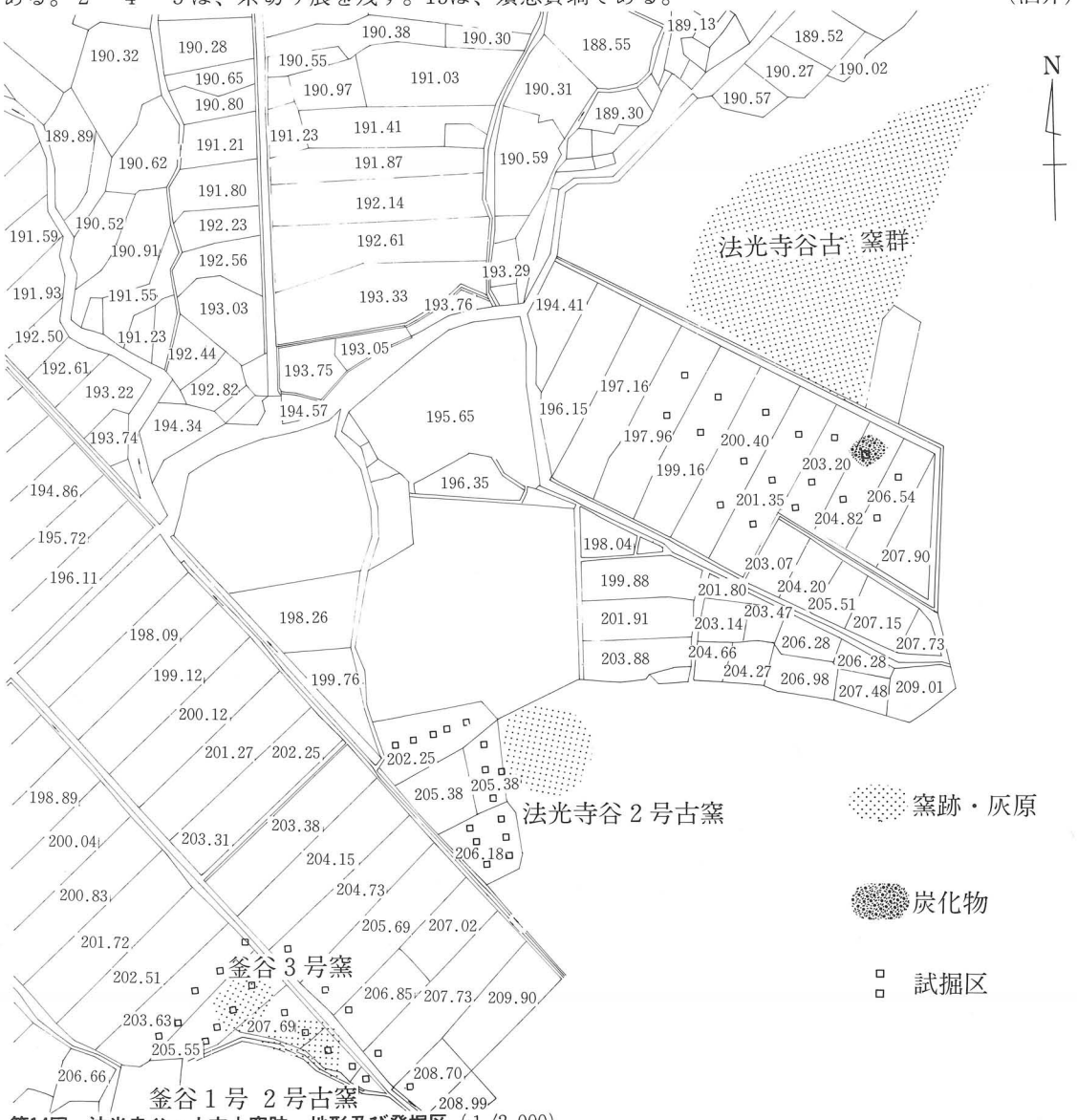
調査の経過と結果　調査は、山裾部粘土採掘跡が、ほ場整備対象地区外であったため、法光寺谷の開田された部分約2400m²を対象とし、５～10ｍの間隔に試掘区を設けて灰原などの確認を行なった。

遺物は、水田の整地により混入したと思われるものが、若干出土した。また、谷部の山裾寄りの部分で１ヶ所、炭化物層を検出した。灰原の１部と考えられる。粘土採掘により破壊された灰原の１部が、北側水田の排水路断面に出ており、残存していると思われる。また、法光寺谷２号窯は、法光寺谷の南側山裾端部に位置し、遺物が雑木林内に散在する。

調査は、尾根の南側畑地を対象として灰原等を確認することとして行なった。遺物は、数点出土したのみであった。発掘総面積は、15m²であった。

遺物（第15図　法光寺谷１～５・15・法光寺谷２号窯６～９）

遺物は、ほとんどが表面採集のもので、蓋（１・２）杯（３）台付き皿（４・５）塝（15）壺などがある。２・４・５は、糸切り痕を残す。15は、須恵質塝である。（酒井）



第14図　法光寺谷・上末古窯跡　地形及び発掘区（1/2,000）

法光寺谷２号窯の遺物は、杯（６）・高台付杯（７）・壺（８）・双耳瓶（９）等がある。６・７は、糸切底の杯で、作りは、全体的に丁寧である。

13　上末古窯跡

調査期間　昭和53年12月25日（延１日間）

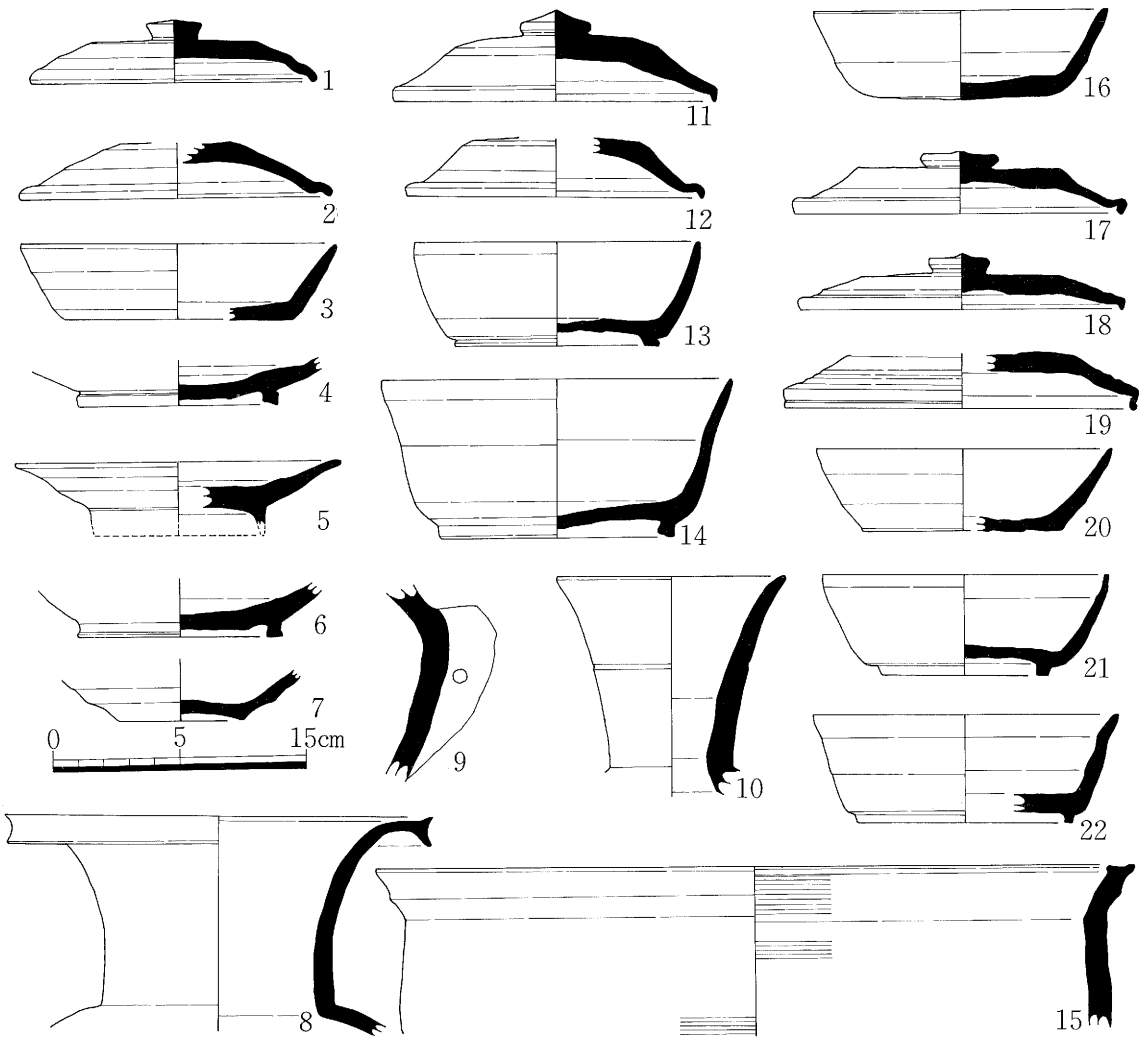
地形（第14図）　古窯跡は、法光寺谷の南側約200m、釜谷の北側山裾に２基、西側に１基存在する。古窯の発見は、大正年間の耕地整理の時で、その後昭和４年に県指定の史蹟となった。１基は、耕地整理で、全壊したという。

調査の経過と結果　調査は、北側から西側裾部に、５～10m間隔の試掘区を設け、窯跡・灰原の有無確認を目的として実施した。北側裾部では、２区で灰原を検出した（第14図・釜谷１・２号窯)。その広がりは、約５×10mで、耕作土下に延びる。また、西側裾部では、２区で確認できたが、窯本体は、整地により破壊されたと思われる。この窯は､旧地形の丘陵が、東から北にかけてＬ字状にいくぶん張り出していたと思われる。西側裾端部に構築されていたと考えられる。灰原は、両者とも良好な状態であった。また、１・２号窯の灰原は、雑木林内にも若干広がると思われる。

遺物（第15図）釜谷１・２号窯跡17～22・釜谷３号窯跡10～16

釜谷１・２号窯の遺物は、蓋（17～19）・杯（20）・高台付き杯（21・22）・壺・大甕等が出土している。蓋19は、外面に糸切痕を残す。１・２号窯は、その遺物から、時期差をもつと考えられる。

釜谷３号窯の遺物は、蓋（11・12）・杯（16）・高台付き杯（13・14）・壺（10）・横瓶・大甕等がある。糸切りの痕跡は、認められない。　（酒井）



第15図　実測図（1/3）　法光寺谷古窯１～５・15　法光寺谷２号古窯６～９　釜谷１・２号古窯10～16　釜谷３号古窯17～22

Ⅳ　まとめ

今回実施した予備調査は、傍頭でふれたとおり分布調査・試掘調査にとどめた。そのため、調査を行ったいずれの遺跡についても遺跡の実態を充分に把握しえなかったが、これは言うまでもなく調査方法のもつ制約によるものである。だが、遺跡の分布・範囲・遺存状況などを確認し、工事との調整を計るという所期の目的は、ほぼ果すことができたと思われる。

ここでは、今回調査の対象とした遺跡の考古学的成果と派生する若干の問題点を概観し、まとめとしたい。

1　縄文時代中期中葉天神山式土器について

日中墓ノ段遺跡で発見された天神山式期の土器は、口辺部が大きく外反し、口縁が逆「く」の字状に内反し、小さく立ちあがる深鉢が多い。ここでは、この器種にかぎりその文様変化を県下にみられる同時期の資料と比較し、その流れを考えてみたい。

新崎式期　中期前葉の新崎式に代表される文様は、口辺部・胴部の文様が大きく２つに区分され、基線隆帯を斜行もしくは、垂下させ、入り組んだ「B」字状文や蓮華文を施す。口縁部には、幅広の無文帯をもつものが多い。文様単位は、２・４単位が一般的である。

天神山式１期　文様は、口辺部と胴部を基線隆帯により横帯に区画し、渦巻き文様を組ませた基線隆帯が胴下半部へ斜行する。基線隆帯間は、三叉文や竹管文が施される。このような土器は、浦山寺蔵遺跡第２期ａ、ｂ種の１部にみられる。

天神山式Ⅱ期　天神山式〔小島　1974〕に代表される土器は、基線隆帯の間を区画化された三叉文・竹管文を施し、過巻き文様を組合せた右下りの基線隆帯が文様を区分する。また口辺部・胴部に文様区画となる基線隆帯は、ほとんどみられず、胴下半部は、縦位の基線隆帯により２・４区画に区切られ、垂下する竹管文を施す。基線隆帯上は、竹管による瓜形文を施す。天神山A類にこの特徴がみられる。

文様単位は、２となるものが大多数をしめる。

天神山式Ⅲ期　日中墓ノ段遺跡の土器は、基線隆帯へ瓜形文・ヘラ状具の刻みを施すものや、無文となるものがある。文様単位は、３・５・６などが多くなり２・４単位は少ない。また、斜行する基線隆帯は、胴下半部で過巻き、縦位に区画されることは少ない。文様のコウ成はａ、ｃ種に代表される。このような基線隆帯の変化は、浦山寺蔵２期ｃ種や、庄川町松原遺跡〔橋本　1976〕などにもみられる。この変化は、近年資料の増化した、基線隆帯をもたずに、過巻き文様を施す土器につづく基線隆帯また、文様の簡略化の表われと考えられる。しかし、基線隆帯が失なわれず「Ｓ」字状に斜行させるものと、まったく基線のみにより文様が施されるものに大きく２分する。このような状況は、二ッ塚遺跡〔橋本他　1978〕などに認められる。このような、天神山式の流れは、浦山寺蔵２期ａ種とｂ種の１部→松原Ⅱ期（天神山ａ、ｂ類）→墓ノ段ａ～ｃ種・浦山寺蔵２期ｃ種→松原Ⅲ期ａ類→水上谷ｂ種〔橋本他　1974〕と考えられる。また、いわゆる天神山ｂ種は、墓ノ段ａ～ｃ種と同期と考えることも可能であるが、ここでは、断定をさけたい。

日中墓ノ段遺跡出土の土器群は、天神山式期の中でも後半に属する良好な資料と考えられる。（酒井）

2　弥生時代末から古墳時代の遺物

立山町の当時期の遺跡は、立山町史により数遺跡が紹介されている〔岡崎　1977〕。

昭和53年度立山町及び隣接町村では、ほ場整備事業及び北陸高速自動車道に伴う事前調査が実施され、その内の7遺跡が弥生時代後期末から古墳時代初頭の時期に所属するもので、集落遺跡と考えられている。

これらの遺跡は、立山町北部地区及びそれ以北の常願寺川・白岩川・栃津川等の扇状地末端の自然堤防上等の微地形上に立地し、標高が約40m以下の沖積平野に存在する。これらの地区には、天神堂古墳・塚越古墳・稚児塚古墳・藤塚古墳等が近くにあって、その間連性を示すものとして注目される。

稚児塚古墳及びその周辺出土の土器（図版第２の１～17）には、壺５・甕２種と口頸部の変化が多い。小底部は上げ底となる。高杯の柱状部は円筒状となり、また器台脚17は外面丹塗りされている。時期は弥生時代後期末に位置付けされる。

辻遺跡出土の土器（図版第２の18～25）には、くの字口縁と口唇部を中凹ませにヨコナデする壺２種と高杯・器台・甑があって、時期は弥生時代後期末に属する。

西反遺跡出土の土器（図版第２の29～34）には、蓋・高杯・甑等があって、その器形から北陸地方土師器第１様式〔吉岡　1967〕の特色をもち、古墳時代初期にあたる。

日中源平衛腰遺跡では、昭和49年のスーパー農道敷設工事の際の出土品〔岡崎　1977〕に弥生後期末の壺・甕・高杯がみられ、今回の調査では器形のうかがえる甕２点（図版第　）があった。その内の１点は縁合口縁の陵線が鈍く、また丸底となることから土師器第２～３様式に含まれ、遺物は２時期にわたる。

（上野）

3　上末釜谷古窯跡について

この釜谷窯跡を含めた上末・法光寺谷窯跡群については、藤田氏による詳細な研究〔藤田1974〕がすでになされている。ここでは、今回の調査で新たに確認しえた点をまとめておく。

今回、調査で確認しえた灰原のあり方から、３基の窯跡の存在を推定しえた。これは、それぞれ釜谷１・２・３号窯と便宜上名づけた。

出土須恵器についてみれば、釜谷１・２号窯では、杯蓋の頂部に糸切り痕をもつものとそうでないものとの二種がみられる。一方、杯身には糸切り痕がいっさい認められず、もっぱらヘラ切り手法によっている。このような製作技法上の様相は、法光寺谷１号窯の出土品と類似している。

ところで、藤田氏が釜谷窯跡の出土品として報告された資料中には、糸切り痕をもつものは認められず、古い様相をもつそれらに対して氏は８世紀末という年代観を与えられている〔藤田1974〕。今回の調査でも、釜谷３号窯と仮称した窯跡からその時期の須恵器が出土しており、釜谷窯跡（群）の開始の時期が、藤田氏の示された年代にあることは、ほぼ変更の余地のないところである。

ただ、今回確認した糸切り痕をもつ資料からすれば、つまり県下での糸切り手法の初現をひとまず９世紀代とすれば、釜谷１・２号窯は９世紀代のものを含んでいることになり、時期幅の存在を考慮する必要があろう。したがって、藤田氏が示された「釜谷窯跡」は、今後、数基の窯跡からなる釜谷窯跡支群としてとらえ、その年代についても上記の時期幅をもたせて理解すべきであろう。（酒井・岸本）

4　越中瀬戸窯跡について

文献や伝承によって知りうる越中瀬戸の窯跡のうち、こんにち窯跡そのものが判明しているものは、甚兵衛窯跡などきわめて少数である。今回の調査で、孫市窯・九左衛門窯の二つの窯跡を新たに検出し、ほぼ同定しえたことは、大きな収穫と言ってよいであろう。

孫市窯は、陶工市右衛門とともに尾張の瀬戸村から慶長年間にこの地にやってきた孫市によって開窯された。陶工は代々孫市を襲名し、明治初年まで製陶を行っていたが、明治20年には廃窯し、その後は窯を借りうけた陶工権三郎が明治40年まで操業、同45年には窯も水田化に伴い壊されたといわれる〔定塚1974〕。

孫市窯をはじめとする連房式登り窯が、製陶を専業とした初期の陶工とその家系によって操業されたのに対し、やや遅れてこの地域に出現し普及した多くの胴窯は、主として農業との兼業として営まれたと推定される。このような考えからすれば、今回検出しえた連房式登り窯の窯元は、当然、限定されることになる。地形的にもまとまりのある孫市窯伝承地の一角から検出した窯跡は、孫市宅地宅に面していることも考えあわせれば、孫市窯そのものとみてまず間違

第16図　窯跡分布図

いないと思われる。焚き口に近い窯室の基底部のみが遺存していたことは、明治45年の水田化により窯が破壊されたという伝承とも一致している。

孫市窯跡の周囲に存在する窯跡及び窯跡伝承地の分布は、第16図に示したとおりである。その中には、長吉窯・市右衛門窯のように、文献に記載された位置（番地）と伝承のそれとが一致しないものがあるが、この点の検討は今後の課題とする。（岸本）

九佐衛門窯　九佐衛門は、越中瀬戸焼の陶工孫市の次男で、新瀬戸に分家して開窯した。この越中瀬戸焼については、今日まで調査、研究がなされているが、十分なものとは言えない。ここでは、現在までに研究された事柄と今回の調査結果とをまとめてみたい。

当地方での窯の調査例としては、昭和15年から昭和17年にかけて３回の調査が、日本海電気会社（現在北陸電力株式会社）の主催によりなされている。また、土木工事、水田耕作の時に製品が出土するため、現地の方々や諸先学が、調査、採集されている。

なお、昭和15年の調査では、九佐衛門窯も調査対象としている。

新瀬戸での窯については、伝承と従来の研究では九佐衛門だけであるとされている。今回の調査でも周囲を調べてみたが、他の窯を確認できなかった。そこで、本窯は九佐衛門窯と推定した。

九佐衛門窯の開窯年代は、「葛巻隼人」から九佐衛門に宛た書状「新窯設置許可書」（寛永17年12月６日付）が一通現存しているため、寛永17年開窯とされている。一方閉窯年代は、諸説があり不明である。伝承では、「良い製品ができないため、長期間の操業はしなかった」とされているが、天保年間廃窯説〔古川1930・野島1972〕もある。

今回の調査により、本窯は胴窯であると考えられる。この胴窯は、寛永５年頃に開発されたらしく、九佐衛門の頃にはかなり普及していたようだ。窯の種類、変化については、胴窯から登り窯に移ったとされているが、今回の調査では登り窯は確認できなかった。本窯の平面形は、方形を基本とし、自然石を利用している。

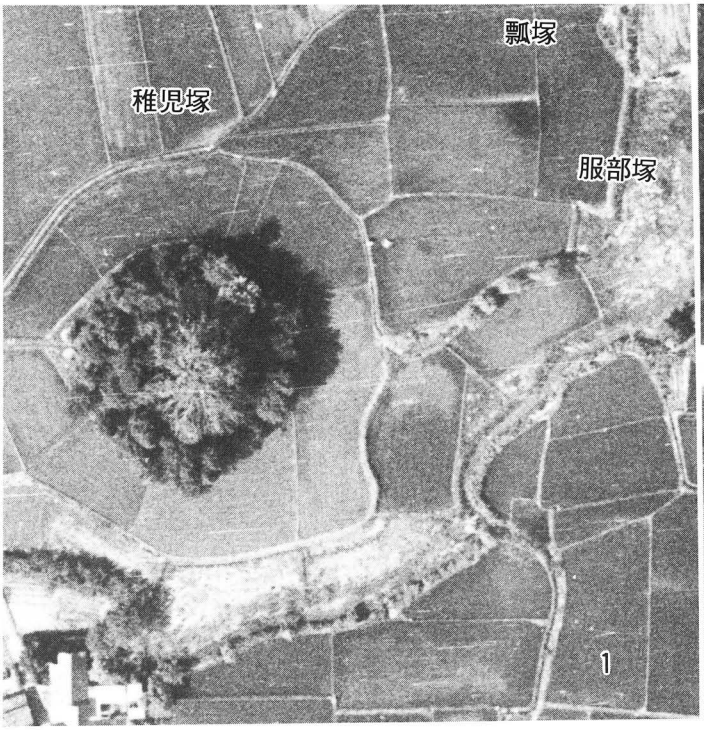
調査の結果、本窯から徳利、瓶子、香炉などは出土しなかった。

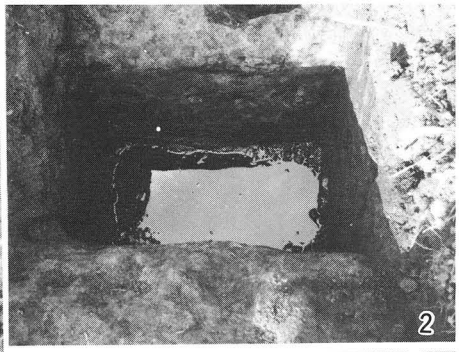
九佐衛門窯の時期については、初期のものとする考え方〔鷹巣1940・長島1960他〕がある。しかし、窯内出土の製品などから、本窯の年代は江戸時代中期と考えたい。

今回の調査では、確認出来なかったが、本窯の周囲には家、作業場、かなくれ山などがあったとされている。また、これからの研究課題として、現存する文書・製品の販売方法・他の窯（陶工）との関係などがあげられる。（橋本）

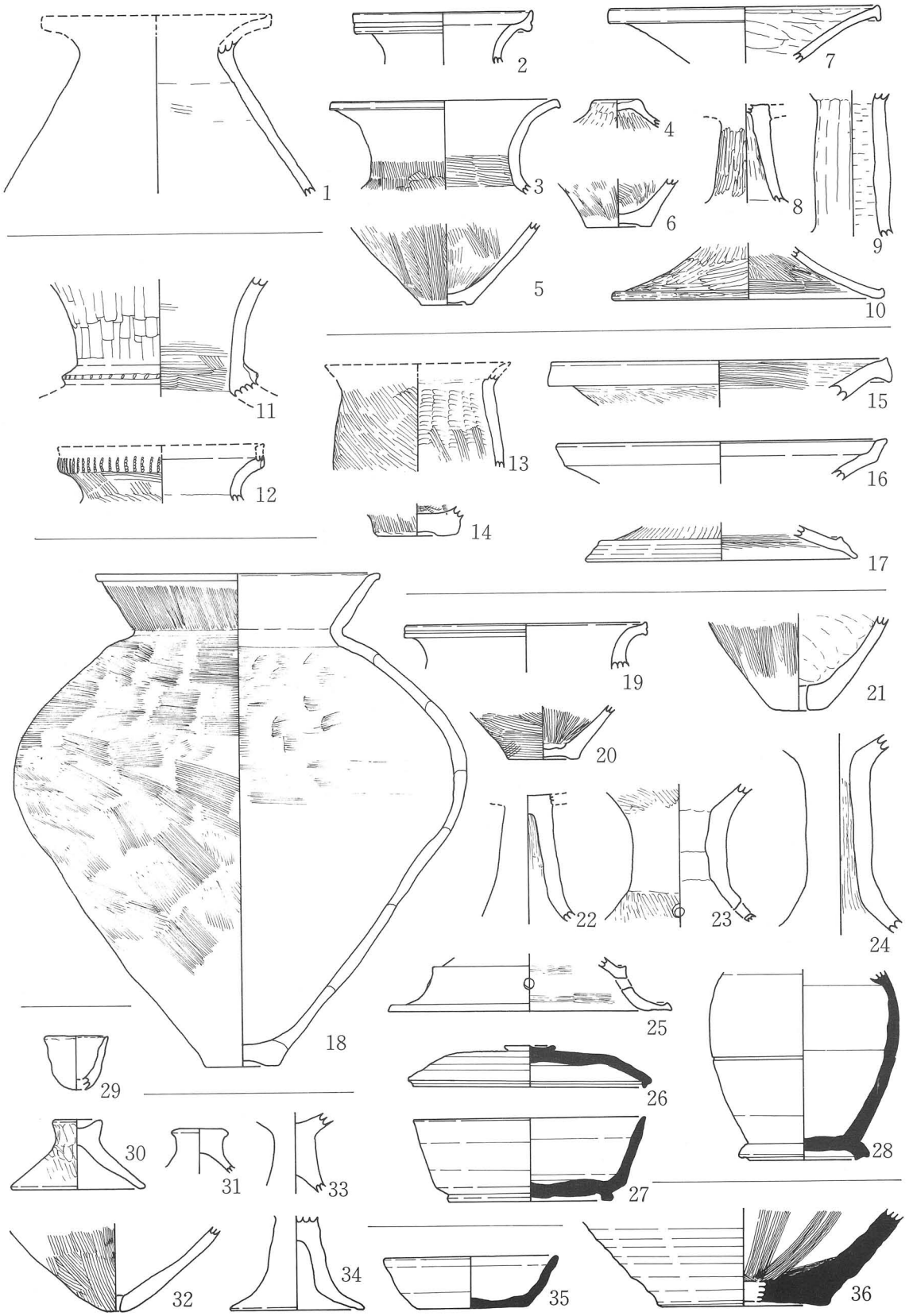
参　考　文　献

オ　**岡崎卵一　1977**　『立山町史』　立山町
　　尾山京三　1977　『越中焼物シリーズNo.1　越中瀬戸焼』　越中瀬戸焼保存会
カ　**加藤　恒　19**　『加賀・越中陶磁考草』
コ　**小島俊彰　1964**　『高岡公園小竹籔縄文遺跡』　高岡市教育委員会
　　小島俊彰　1965　『極楽寺遺跡発掘調査報告書』　富山県教育委員会
　　小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年」　大境第５号　富山考古学会
サ　**酒井重洋・橋本正春　1977**　『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
　　酒井重洋　1978　「竜ヶ浜遺跡」『富山県昭和53年度発掘調査一覧』　富山県教育委員会
シ　**定塚武敏　1974**　『越中の焼きもの』　富山文庫２
　　神保孝造・岡上進一・松本幸治　1977　『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
タ　**鷹巣豊治　1930**　「越中瀬戸古窯地発掘に就て」『茶わん』
ト　**東條野人　1940**　「古文書から見た越中瀬戸焼の創窯に就いて」『高志人』　第５巻第５号
ナ　**長島勝正　1960**　『越中瀬戸焼』　越中瀬戸焼保存顕彰会
ノ　**野島好二編　1972**　『越中のやきもの』　越中文化研究所
ハ　**橋本　正・神保孝造　1974**　『小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概報』　富山県教育委員会
　　橋本　正・柳井　睦・池野正男・神保孝造　1975　『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』　富山県教育委員会
　　橋本正・柳井睦・池野正男・酒井重洋　1978　『富山県立山町二ッ塚遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
　　林与作　1960　『越中瀬戸焼について』
フ　**藤田富士夫　1974**　「富山県立山古窯群」　考古学ジャーナルNo.97
　　舟崎久雄　1974　「第Ⅱ章　土器の絹年」『富山県埋蔵文化財調査報告書』　富山県教育委員会
　　古川喜代吉　1930　『越中瀬戸焼陶窯ニ就テ』.
ミ　**湊晨・広田寿三郎・大谷清瑞　1959**　『天神山遺跡調査報告書』　富山県教育委員会・魚津市教育委員会
ム　**村秀三　1935**　『越中陶器の變遷』　南陽堂刊行
ヤ　**山本久作　1934**　『越中製陶史稿』
　　山本正敏・神保孝造　1975　『金剛新遺跡発掘調査概報』　立山町教育委員会
　　柳井睦・池野正男　1976　『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
　　安田良栄　1974　『立山町日中墓ノ段遺跡調査報告書』　立山町教育委員会
ヨ　**吉岡康暢　1967**　「北陸における土師器の編年」　考古学ジャーナルNo.6
　　吉岡康暢　1976　「Ⅳ総括　1.土器編年と遺構の年代」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』石川県教育委員会

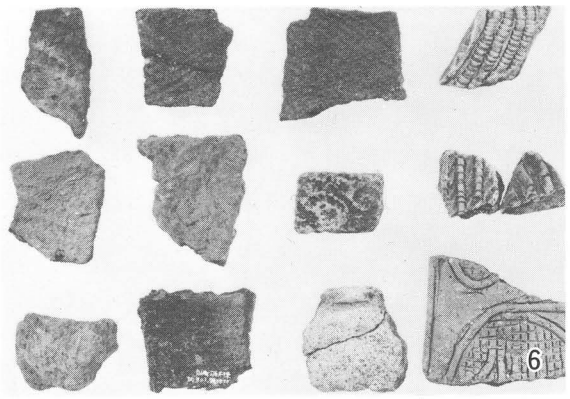




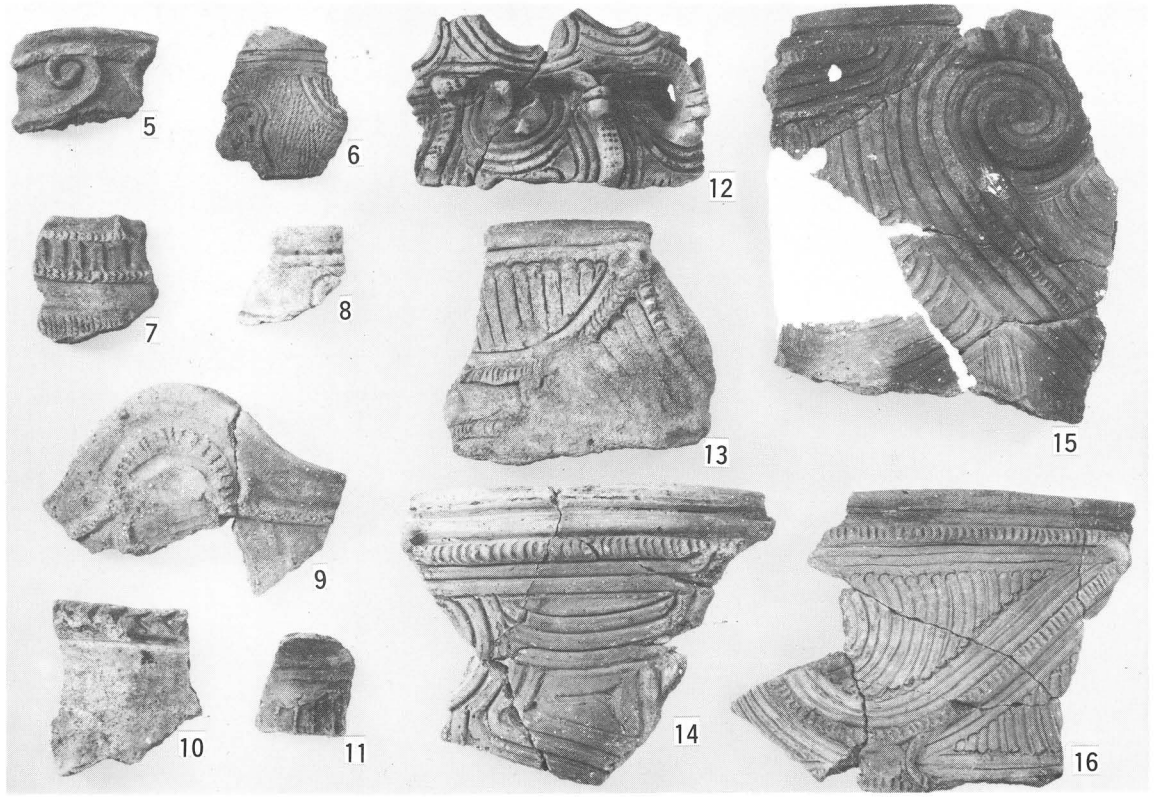
図版第1　1．稚児塚の鳥瞰　2．弥生時代末の溝　3．瓢塚の発掘風景　4～6．辻遺跡　7～9．西反遺跡



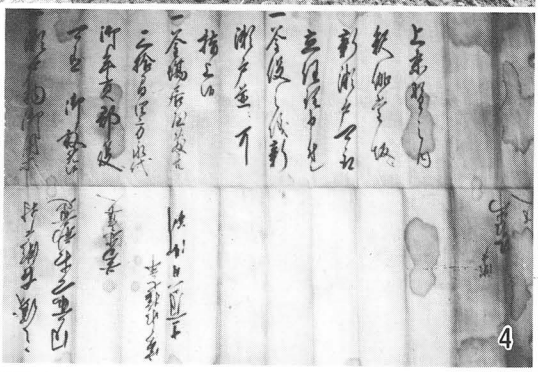
図版第2　1～10.稚児塚遺跡　11～17.瓢塚遺跡及びその周辺　18～28.辻遺跡　29～36.西反遺跡（¼）

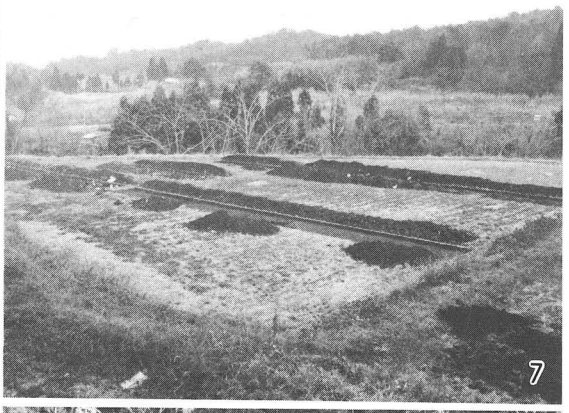


図版第 3　1～3.日中城跡　4～6.日中源平衛腰遺跡　7～8.越中瀬戸古窯跡群 1 地点

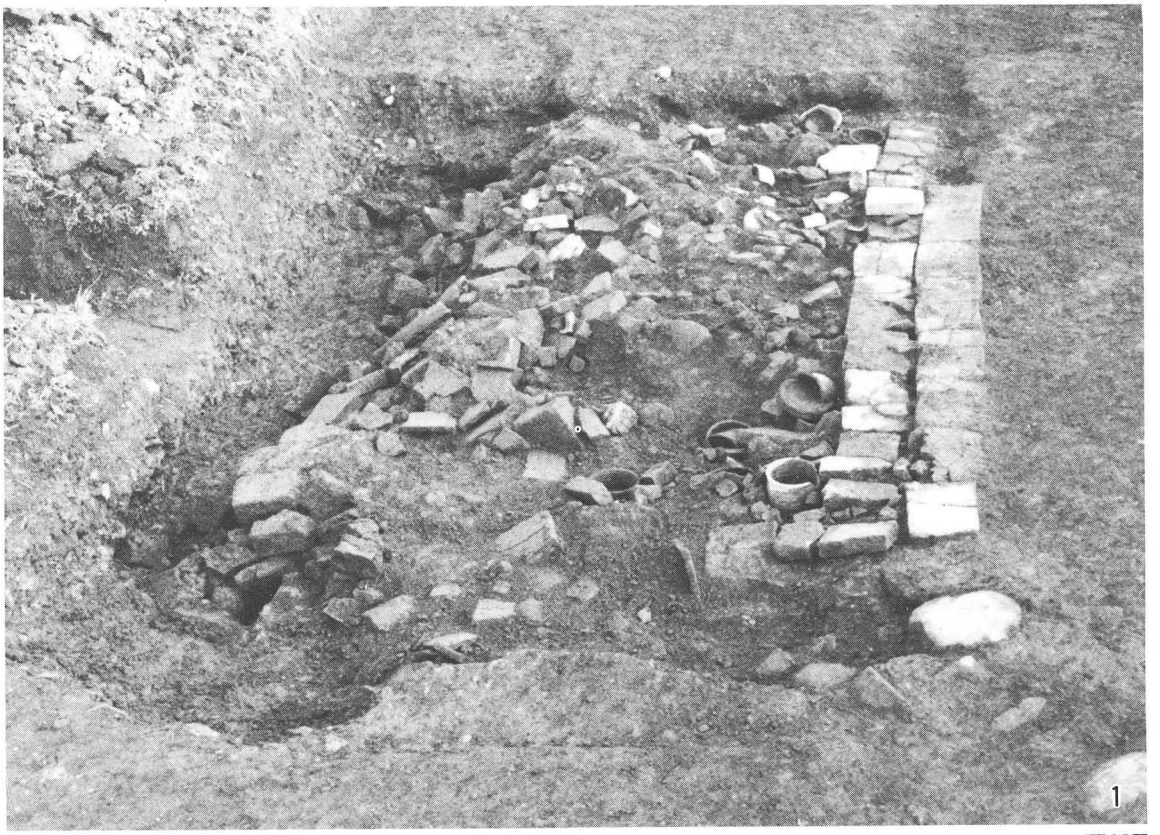


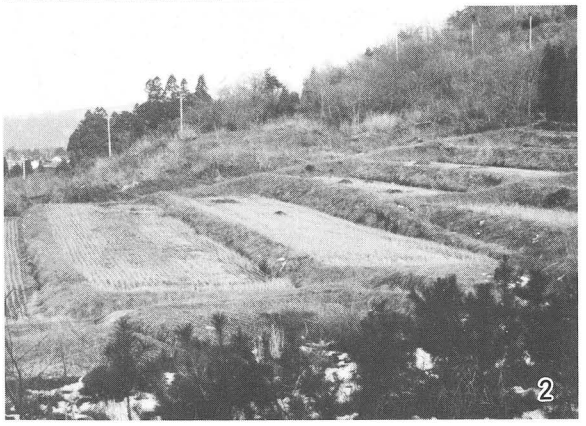
図版第4　1．北から　2．南から　3．住居跡　4．炉　5～16．遺物（¼）





図版第5　1～5．新瀬戸古窯跡　6・7．越中瀬戸古窯跡群　8．越中瀬戸古窯跡群出土窯道具　9．越中瀬戸古窯跡群縄文時代炉跡





図版第6　1．越中瀬戸焼第2地点窯跡（西から）　2．法光寺谷古窯跡（南から）　3・5．法光寺谷2号窯（南から）
4．上末古窯跡（東から）

富山県
立山町埋蔵文化財
予備調査概要
発行日　昭和54年３月31日
発行者　立山町教育委員会
編　集　富山県埋蔵文化財センター
印刷者　㈲日本海印刷